



JIA 建築家大会 2025 千葉

せんのちから

多様性を尊重し繋がりを生み出す、社会と建築のあり方について

学生レポーターによる大会報告

2026 年 1 月



公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 大会実行委員会

Ⅰ はじめに

本書は 2025 年 11 月 7 日（金）・8 日（土）の 2 日間、千葉県文化会館・千葉大学ゐのはな同窓会館で開催した JIA 建築家大会 2025 千葉の公式レポートです。

本大会では、未来の建築・まちづくりを市民や学生みなさんと考えることを目標に掲げ、建築・まちづくりに関する 22 のトークセッションを企画し、累計視聴者数 約 2,900 人と過去最大規模の参加者数の大会が実現できたこと、誠に感謝申し上げます。

また、大会運営に際しては、千葉大学 鈴木弘樹研究室、千葉工業大学 今村創平研究室を中心に、数多くの大学や建築学生みなさんに御協力頂きました。

本書は 22 のトークセッションと大会式典について、学生がレポーターとなってそれぞれの視点から報告を行うものです。最大 5 プログラム同時進行という大会運営により当日見逃した方、大会に参加できなかった方々にも JIA 建築家大会 2025 千葉での議論を知って頂ければ幸いです。

JIA 建築家大会 2025 千葉 大会実行委員会 企画部会

※注： 本書に掲載されているすべての内容の著作権は、各記事の著者・公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部に帰属し、無断での二次利用は法律により罰せられることがあります。

■ JIA 建築家大会 2025 千葉 概要

テーマ：**せんのちから**

多様性を尊重し繋がりを生み出す、社会と建築のあり方について

開催日時：**2025 年 11 月 7 日（金）・11 月 8 日（土）**

会 場：**千葉県文化会館・千葉大学ゐのはな同窓会館**

開催主旨：今、私たちの身のまわりには、温暖化といった地球規模の課題から、超高齢社会や人口減少、大都市の膨張と消滅可能性都市、食料自給率の低迷と貧困など、様々な問題が溢れています。それゆえ地域や社会の存続が危ぶまれており、そこには建築や地域も深くかかわっています。このような状況に対応し、〈持続性をもつ好ましい社会〉を実現するためには、幅広い分野にわたる多様な知見・職能・技術の融合が欠かせません。

2025 年秋、国際建築家連合（UIA）に日本を代表して加盟している公益社団法人 日本建築家協会（JIA）は、JIA 建築家大会 2025 千葉を開催します。〈持続性をもつ好ましい社会〉を構想し、実践している、建築家・技術者・行政・運営者・市民・学生など 100 名が発表をし、これからの建築や地域についてともに考える 1,000 人会議を行います。

現代社会は多様な価値・考え・立場が共存することで成り立っています。個々の尊重と社会の全体像は矛盾しますが、多様な個が相補的に繋がることが、〈持続性をもつ好ましい社会〉の基盤となるのではないのでしょうか。立場や分野を越えた多様な職能を持つ幅広い分野の方々との協働がいま求められており、そうした議論をする場を提供します。

主 催：公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

運 営：公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 大会実行委員会

目次

Locality 地域の個性を活かす

- S01 | 歴史的意義ある建築の保存と誇るべき日本の景観
～価値ある建物の保存・利活用を県民と考える＝県立図書館と大高建築～
- S02 | 千葉のまちの真ん中をデザインする
～開府 900 年から 1000 年へ向けた持続可能な賑わいづくりと人づくり～
- S03 | DOCOMOMO 建築に学ぶ創造性—DOCOMOMO Japan 25 年

REPORTER

- … 村山昇穂 / 千葉大学 4 年
- … 西村和奏 / 千葉大学大学院 修士 1 年
- … 佐藤祐莉彩 / 千葉工業大学大学院 修士 1 年

Community 地域社会・地域産業との繋がり

- S04 | 都市と地方が混在する千葉の食・文化の現状と未来
～農とまちを繋ぐコミュニティから考える～
- S05 | 地域づくりと建築家の新たな活動
- S06 | ケアと建築
- S07 | 木材の非生産県における地域木材活用のための社会の仕組みづくり
～安定した木材生産にむけた千葉県の林業と建築家の連携～

- … 漆原東子 / 千葉大学大学院 修士 2 年
- … 平瀬美咲 / 千葉工業大学大学院 修士 2 年
- … 川上拳汰 / 千葉工業大学大学院 修士 2 年
- … 柴田育朗 / 千葉大学大学院 修士 1 年

Innovation 未来社会に向けた新たな取り組み

- S08 | 土と水と建築・都市
- S09 | 建築とテクノロジーの関係を問い直す—若手建築家が見据える設計の未来
- S10 | 気候変動や社会変容を見据えた持続可能な社会基盤の未来像
～建築・ランドスケープの新たな関係性を探る～
- S11 | 事前防災への取組と今後の展望

- … 副島碧 / 千葉工業大学大学院 修士 2 年
- … 奥富樹 / 千葉工業大学大学院 修士 1 年
- … 石井美沙 / 千葉工業大学大学院 修士 1 年
- … 平田雅也 / 千葉大学大学院 修士 1 年

Education 次世代を担う建築家たち

- S12 | JIA 全国 10 支部合同企画「注目の若手建築家による建築討論」
- S13 | 第 19 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展「In-Between」から考える：
建築をたがやし情報を育てる実践
- S14 | 社会に発信する建築家のメディア実践を考える
- S15 | これからの職能に向けて、建築教育はどうあるべきか
- S16 | 建築学生が考える「これからの建築と社会」@千葉

- … 細矢晶大 / 千葉大学大学院 修士 2 年
- … 坂内俊太 / 千葉工業大学大学院 修士 2 年
- … 井戸端靖 / 千葉大学大学院 博士 2 年
- … 飯塚真尋 / 千葉工業大学大学院 修士 1 年
- … 千葉雄介 / 千葉大学大学院 修士 1 年

Architect 世界の建築家・日本の建築家

- S17 | 私にとっての「槇文彦」
- S18 | International Presidents' Forum (IPF)
- S19 | 「建築家」ってだれですか？
- S20 | 偉大な先輩建築家に学ぶ Vol.10 大高正人一人と都市と建築
- S21 | 《越境建築家》たちとの対話—「越境」が建築家にもたらすもの—

- … 高澤政弘 / 千葉大学大学院 修士 2 年
- … 沓掛涼太 / 千葉工業大学大学院 修士 2 年
- … 高山茉佑子 / 千葉大学大学院 修士 2 年
- … 鹿野田大樹 / 千葉大学大学院 修士 2 年
- … 藤本千廣 / 千葉工業大学大学院 修士 1 年

Overview オーバービュー

- S22 | 〈オーバービュー・セッション〉せんのちからと建築家のつながり

- … 猪股楓 / 千葉工業大学大学院 修士 2 年

JIA 建築家大会 2025 千葉大会式典

- … 山田拓武 / 千葉大学 研究生

S01 歴史的意義ある建築の保存と誇るべき日本の景観

～価値ある建物の保存・利活用を県民と考える＝県立図書館と大高建築～

開催日時：2025 年 11 月 7 日（金） 14:10 ～ 15:40

会 場：千葉県文化会館・大ホール

登壇者：森田敬介 建築家／森田建築設計事務所

穎原澄子 千葉大学教授／DOCOMOMO Japan 副代表理事

山口俊浩 文化庁 企画調整課

高橋直子 建築家／伝統建築研究所

篠田智仁 建築主事／茂原市役所職員

REPORTER



村山 昇穂
(千葉大学 4 年)



当日の来場者の様子

1. 企画の意図

本大会の会場である千葉県文化会館は、1960 年代に建築家 大高正人の設計により、聖賢堂、千葉県立中央図書館と併せて「千葉文化の森」という理念の下で 1960 年代に整備された。これら一連の建築群は、その価値が認められ、2018 年度には DOCOMOMO Japan の選定作品となった。

現在、この敷地内の建築群はそれぞれ異なる状況にある。千葉県文化会館は全面改修工事を完了したが、一方で 2024 年にその建築群の一つである聖賢堂が専門家の諮問を経ることなく解体された。また、老朽化に伴い新館建設が計画されている県立中央図書館については、現存する建物の今後の在り方が未定である。

近年の日本では、建築物が持つ文化的価値よりも、築年数や経済合理性が優先され、地域の資産である建築が失われるケースが見受けらる。本企画では、大高建築の代表作の一つである「千葉文化の森」を事例に、公共建築物のあり方について、歴史的建造物の保存利活用、県民の建築に対する価値観や他国との比較など、様々な視点から議論が行われた。

2. トークセッションの概要

トークセッションでは、市民の立場による建築の保存と行政の立場から、公共建築物への施策について議論が行われた。

千葉大学 穎原澄子教授は、大高正人が設計した千葉県立図書館、千葉県文化会館・聖賢堂が一体となった、



本大会の会場となった、大高正人による「千葉文化の森」の建築群

左上：聖賢堂

左下：千葉文化の森（地理院地図より）

右上：千葉県立中央図書館

（千葉日報より）

右下：千葉県文化会館（公益財団法人千葉県文化振興財団より）

「千葉文化の森」を群造形としての保存活動に関わり、DOCOMOMO Japan 副代表理事として、建築の保存活動に参加している。

建築家の高橋直子氏は、宮城県美術館の移転に対して、市民とともに美術館の現地存続運動を成功させた事例から、市民と公共建築の在り方について語った。

また、文化庁の山口俊浩氏は、建築を文化財としてその価値の継承と活用を、他国との施策の比較や今後の日本における建築の保存活用の方針を示した。

茂原市役所職員の篠田智仁氏は、自治体が公共建築の解体を行うまでの過程について、その背景と流れを説明した。

また、森田敬介氏は建築を文化芸術として捉えようとする立場から、歴史的建造物の保存利活用をテーマとした本セッションのコーディネーターを務めた。

議論の焦点となったのは、自治体による公共建築物の解体へのプロセスである。穎原教授が関わった聖賢堂や高橋氏が関わった宮城県美術館の移転は、突如として解体、移転の計画が進められた。



セッションの様子

森田氏はこれに対し、自治体はこの公共建築物の解体について、限られた財源や今後の税収の減少といった観点から、財政的な側面から解体リストとして建築物が挙げられる場合があるとした。しかしながら、計画段階の中で、市民による意見や要望を受け入れる期間は取り込まれている点についても指摘した。

このような公共建築の解体について、潁原教授は市民による建築への理解が最も重要であるとした。この建築への理解のために、建築物の魅力を地道に発信し続けることが必要である。市民が集まる場所として建築を利用し、その価値を多くの人々に知ってもらうこと、そして市民が建築に興味を持ってもらうことで、市民が建築に対して主体的に働きかける状況になることが、建築の保存における重要な要素であると指摘した。

また、高橋氏は市民が建物を知らなすぎることにについて指摘した。この点について、建築を知る者が建物の魅力と欠点についても同時に伝え、今後の活用方法などを議論する場を積極的に設けることが必要であるとした。さらに、行政が市民と同じ立場で建築の在り方について検討することで、建築を通じてより良いまちづくりが行われていくのではないかとした。

国の省庁としては、経産省、観光庁、文化庁、外務省などが、建築の保存活動に取り組んでいることを山口氏は説明した。しかしながら、これらの省庁は独立して各課題に取り組んでいるため、各省庁が行っている活動を一体となって活動できる場をつくるのが、今後の建築の保存に関する施策の方針であることを同氏は示した。

最後に、建築の保存において、行政と民間のそれぞれにできることは何かについて議論が交わされた。

森田氏は行政に対し、建築を文化芸術の一つとして捉えることや、建築の解体計画について計画の早い段階

から市民が分かる仕組みをつくることの必要性について述べた。

一方、高橋氏は市民に対しての教育の大切さについて語った。同氏は建築のみならず、自身が住まうまちに誇りと興味を持ち、まちの未来を考えさせることが重要であるとした。

そして、潁原教授は、建築は市民のものであることを前提としたうえで、建築外の活動も重要であるとし、建築だけで留めるのではなく、建築外の活動については、国や自治体と市民の活動の蓄積の中で、一步一步進めていくことが大切だと述べた。

3. まとめ

今回のトークセッションでは、公共建築物の解体について、行政と民間の双方の立場から、議論が行われた。行政による公共建築の解体は財源の見直し等を理由に計画されるが、大高正人の設計による聖賢堂の解体は、計画段階で市民との話し合いが行われなかった。

話し合いが行われなかった要因の一つとして、「市民の建築に対する意識や認識の欠落」であったことがトークセッションの中でも議論の中心となった。

実際に建築を守ることができるのは、地元の市民一人一人である。公共建築物のみならず、まち全体をより住みやすい環境にしていくために、市民はまちづくりに対して主体性を持つ必要がある。したがって、建築に携わる私たちがすべきことは、建物単体の保存にとらわれず、まち全体の未来や課題について、市民と共に考えるきっかけを作ることである。

その延長線上に、後世に残すべき建築の価値について、市民一人一人が理解することで、建築の保存をはじめとした主体的なまちづくりが行われるのではないかと感じた。

S02 千葉のまちの真ん中をデザインする

～開府 900 年から 1000 年へ向けた持続可能な賑わいづくりと人づくり～

開催日時：2025 年 11 月 8 日（土） 10:00 ～ 11:30

会 場：千葉県文化会館・大ホール

登壇者：大木戸孝也 千葉市都市局都市部都市計画課課長

明里 千葉県の郷土史家

田中章 食楽 ICHIBA 代表／そののかけら店主

須崎雅之 ちこほこ実行委員会代表／Sudo-Bags 店主

田野恵 子ども食堂「縁」代表／三希工房

松浦健治郎 都市計画家／千葉大学准教授

連健夫 建築家・まちづくりコンサルタント／連健夫建築研究室

REPORTER

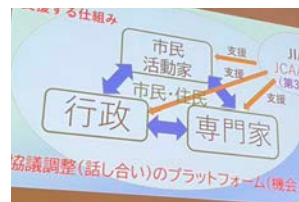


西村和奏

（千葉大学大学院 修士 1 年）



当日の会場。参加者は老若男女問わずみられ、途中から徐々に席が埋まり始めた。



当日のセッションの様子。

1. 企画の意図

本企画は、千葉駅周辺における中心市街地の衰退と活性化の動向に着目し、近年、市民団体や企業、行政、大学が協働して進めている社会実験的な取り組みを契機に、地域の持続性向上に向けた新たなまちづくりの可能性を探ることを意図したものである。高度経済成長期以降に発展した千葉駅周辺は、郊外型商業施設の拡大により停滞を経験したが、再開発やイベントを通じて人々が関わり続ける「協働型の都市づくり」のあり方を検討する場とした。

2. トークセッションの概要

冒頭、本セッションの企画協力者である建築家・飯沼竹一さんより、本企画の趣旨に加え、千葉都心の形成過程や戦後の復興、さらに現在抱える商業衰退や空洞化といった課題が示され、続く討論で扱われる解決策への導入となった。

続いて、大木戸孝也さん、明里さん、田中章さん、須崎雅之さん、田野恵さん、松浦健治郎先生、連健夫さんの 7 名が自身の活動や実体験をベースに、人と人との関わり合いを注視した千葉のまちなかでのまちづくりについてプレゼンテーションを行った。

大木戸さんは、人中心の空間へ再編するためのグランドデザイン改定を軸に、地区ごとに性格の異なる千葉駅周辺の特性より、建物更新やウォークアブル推進などを通じてそれぞれに応じたまちづくりが大切であるとした。行政が皮切りに活動が動き出すと市民も参加しやすいため、まちなか革新への良い兆しを感じた。

上段左：意見を述べる松浦先生。上段右：わかりやすく可視化された主体間関係。
下段左：タイムキーパーのあまりにも誇張的な時間管理は会場の笑いを誘っていた。
下段右：ゲストとして神谷千葉市長が来られ、今後の展望について熱く語られた。

明里さんは、かつて商店街や花街文化が集積し賑わいがあった千葉市・栄町の様相から、現在は衰退しつつある当地域において、まちの記憶や建築を記録し継承する重要性を示した。学部時代、花街を研究していた立場からすると、正しく記憶を継ぐという意味でまちの記憶を残すことの重要性が再確認された。

田中さんは、千葉市内を歩いて楽しめるエリアとするために、音楽と飲食を軸にしたまちなかイベントの紹介を通じて、人の滞在を生み出すノウハウを示した。エンターテインメントの視点で場の活況が学べ、市民一人一人が主役となれる仕掛けに興味深かった。

須藤さんは、歩行者空間活用の社会実験「ちこほこ」を通じ、地域・店舗・学生が交流できる憩いの場が生まれたと述べ、継続的な担い手確保を課題に挙げた。彼は自分の店を構えるかたわらまちなかの空間再生にも従事していることから、千葉市に対する自身の活動の波及効果や還元が効率よく行なえると感じた。

田野さんは、子ども食堂や空き家活用により誰もが安心して過ごせる地域の居場所づくりの重要性を強調した。私は空き家活用も研究の一環で取り組んでいたが、今回の彼女のプレゼンテーションから、ただ空間を活用するだけでなく、使う人の立場やどのような空間であると快適に使えるかなど、使い手の立場に立って検討することが何より大切であると学んだ。



当日のトークディスカッションの様子。登壇者同士が顔を見合わせながら、和やかな雰囲気で行なわれていた。

私の研究室の先生でもある松浦先生は、山武ベンチの設置活動や葭川周辺の親水空間の活用可能性を通じて、人々がただ「通り過ぎる場」を「滞在の場」へと転換させる方向性を示した。実際に研究室のプロジェクトに参加している立場として、人と地域の関係を育てるという点はかなり共感でき、様々な視点や意見が介入することで、よりよいまちづくりができあがると改めて感じ、今後のワークショップでも周囲とのコミュニケーションを大切にしたいと感じた。

連さんは、住民・行政・専門家が対話しながら、地域の魅力と課題を共に見出し、未来を描き、ルールをつくるプロセスの重要性を述べた。まちづくりコンサルタントならではの視点で様々な主体の関わり合いが可視化され、意義あるプレゼンテーションであった。

7人のプレゼンテーションを聞き、まちなか再生へのアプローチ方法は実に多種多様であることが改めて図り知れた。様々な活動やより多くの主体の参画を通じて、まちと人との親和性がより強化され、改善されていくものだと感じた。

後半は、今後の市民が関われる千葉のまちづくりについてディスカッションが行われた。ここでの論点は、主に余白を生かしつつ、人が関わり続けられる仕組みづくりが大切であることが議論されていた。

その中でも関心深かったのが、デジタルプラットフォームについてである。デジタルプラットフォームとはインターネット上で老若男女問わずだれでも意見を書き込めるサイトであり、この仕組みを活用することで、ワークショップやその外部の活動に積極的に参加できない市民であっても気軽に意見を反映することができる。この事について大木戸さんも「中プロデザインラボ（ワークショップの一環）に参加することが市民にとってハードルを上げている」中で、このプラットフォームは優位なものになると言及していた。また、

連さんは「大事なことはプラットフォームを作ること」とし、市民の方々に行政をうまく利用してもらうことで協議調整の場としてのきっかけづくりにもつながると述べていた。このように異なる視点からも、プラットフォーム活用は市民のまちづくり参画への近道につながることが明らかとなった。

3. まとめ

本セッションでは、千葉市内で取り組まれている様々な取り組みを通して、人々がよりまちに関われるような道しるべがいくつか示されていた。それは、イベントや社会実験といったソフトなものから、最適な建築空間の創造といったハードなものまで様々なアプローチでおこなわれている。

そんな中、松浦先生も仰るように、自由度の高くよそ者も受け入れるという千葉の独自性を生かしつつ、我々がまちを育てると同時に我々も育っていくという「まち育て」が今後のまちづくりの中で重要となる。

今回、私が学生レポーターとして感じたことは千葉のまちなかの空間をよりよくしていくためには、より多くの人々のつながりが必要であり、そのために様々なイベントやプロジェクトの企画者である私たちがもっと積極的に市民に働きかけることが必要であるということであった。

すでにまちの関係者たちにより、「ちこほこ」や「食楽 ICHIBA」のイベントが行われるなど、千葉市内のまちなか改革は前進しつつあり、様々な主体の尽力のおかげで、ここまで様々な企画が進んでいることに感謝しなければならないと改めて感じた。

今後この前進のギアを上げていくためにも、私も一市民として、積極的にワークショップに参加したり意見を反映させたりしようと決意した。

S03 DOCOMOMO 建築に学ぶ創造性

～ DOCOMOMO Japan 25 年～

開催日時：2025 年 11 月 8 日（土） 14:15 ～ 15:45

会 場：千葉県文化会館・大練習室

登壇者：安田幸一 建築家／安田アトリエ／東京科学大学名誉教授

渡邊研司 建築史家／東海大学教授／

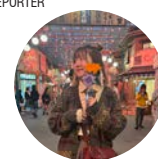
DOCOMOMO Japan 前代表理事

田所辰之助 建築史家／日本大学教授

鯉坂徹 建築家／鯉坂建築研究所

藤木竜也 建築史家／千葉工業大学教授／ DOCOMOMO Japan 理事

REPORTER



佐藤 祐莉彩
(千葉工業大学大学院 修士 1 年)



当日の会場。部屋に入りきれないほどの聴衆が集まった。
登壇者は、左から順に藤木竜也さん、安田幸一さん、渡邊研司さん、田所辰之助さん、鯉坂徹さん。



トークセッションでは、DOCOMOMO Japan と JIA のこれまでの活動報告や、今後の課題について共有が図られた。

1. 企画の意図

DOCOMOMO Japan は日本支部設立から 25 年を迎え、DOCOMOMO Japan の選定建築物は 300 選に達した。これまで、主に戦後昭和のモダニズム建築を学術的に評価するとともに、建築作品の保存や日本文化の継承を支援してきた。本セッションは、近年におよぶ DOCOMOMO 選定建築物の系譜を振り返りながら、モダン・ムーブメントの建築に込められた先達の建築家達の創造性を学ぶとともに、日本建築家協会 (JIA) と DOCOMOMO Japan との関係や、歴史的建築物の今後の望ましいあり方について考えることを目的としている。

2. トークセッションの概要

はじめに藤木竜也さんから今回の趣旨説明が行われた。DOCOMOMO Japan は日本支部設立から 25 年、DOCOMOMO Japan 選定建築 300 選の節目を迎えた。近年におよぶ DOCOMOMO 選定建築物の系譜を振り返るとともに、日本建築家協会 (JIA) の視点を交えて、JIA と DOCOMOMO Japan のより積極的な協働関係の構築を目的としていると語られた。

安田幸一さんは土浦亀城邸の改修を中心に建築史家だけでなく建築家が復原に関わる意義について思考した。土浦亀城邸は「1935 年へタイムスリップすること」をキーワードとして、90 年前の姿へ復元し、それをさらに 90 年後へ継承することを目標とした。安田さんは、何年先の後世へ継承するかを最初に考えなければ

いけないこととし、建築家と建築史家が協議をした上で、それを出発点として計画をするべきと語られた。DOCOMOMO Japan は建築家の意見を聞きながら作品選定を行い、建築の社会的評価を高めてきた。一方、JIA は建築史家と共に作品に関わり、具体的な保存・再生手法の提案、既存建築を設計した建築家の考え方を解体時などに発掘する役割を担ってきた。これが両団体が存在する意義であり、共同で目指す方向性であると指摘した。土浦亀城邸の改修では、残されたスケッチや写真から、2 尺 X3 尺のモジュール、コーナーのアル、補強金物といったオリジナルの要素を抽出し、単なる材料ではなく思想を継承するという形で復原された。時間に対しての向き合い方をいかに構築するか、そのために調査が不可欠であることが強調された。

田所辰之助さんは DOCOMOMO Japan の選定方法からプロセス、これまでの更新内容、この先の選定について評価軸など現在登録されている建物を紹介しながら説明した。選定は 20 選からはじまり、DOCOMOMO Japan と建築史家の合同会議によってこれまでの選定補完、150 選以降は地域資産の価値の見直し、保存活動の支援がされるようになり、それに対応する形で推薦用シートが作られた。環境形成、幾何学的な構成に基づいた心理性を評価軸にいれ、2023 年には竣工後 35 年を経過したものと変え、時代性という評価軸を新たに加えた。また、使い続けることの大切さを評価に入れ、継続性、地域性、意匠性、作家性、技術性、6 つの指標を用いて評価をしている。学



登壇者のプレゼンテーション後、JIA 側から今後に向けた意見が共有された。

会では建造物保存活動ガイドライン、文化庁では近現代建造物緊急重点調査事業を実施し、社会資産として保護活動が行われている。今後は、形態や材料だけでなく精神と感性といった形にならない部分も保存の対象という考えが広まっていくことから、DOCOMOMO Japan でも議論が必要となる。

渡邊研司さんは DOCOMOMO Japan 創設期を振り返り、建築家は歴史から何を学ぶのかを語った。DOCOMOMO Japan は近代の中でもモダニズムを対象とし、合理的思想によってつくられた建築を対象としている。渡邊さんは AA スクールでの出会いから DOCOMOMO を知り、それ以降すべての大会に参加している。そこから日本で DOCOMOMO の活動をはじめ、2003 年に日本支部設立、2018 年には一般社団法人となった。現在の課題として、理事の JIA 会員の割合が減っていることが挙げられた。また、建築家は歴史からどう学ぶのかについて、発展は先人の積み上げた知識の上で成り立つことを重要視していた。近代建築の保存の意義と方法について、現近代建築というキーワードから、現代に軸をおくことは JIA の重要な視点であり、現代の目を通して過去を見ることは現代を生きる我々は常に歴史に問いかけているのではないかと結論づけた。

鯉坂徹さんは DOCOMOMO Japan と JIA の双方の立場から保存活動の経緯と両者の重なりについて説明した。保存運動は 1961 年頃、絶対高さの撤廃により、建物が次々と解体されはじめたことを契機におこった。1989 年に JIA は保存問題委員会を設立し、現在 DOCOMOMO Japan が行っているような保存活動を JIA が担っていた。1999 年に 20 選展を機に日本支部が設立された。2005 年以降はモダニズム建築が重要視されるようになり、建て替えが保存へと変わっていった。JIA では法的な観点から保存方法の研究が進められ、2017 年には鉄筋コンクリート造の中性化に

対する安全性、2024 年には室内の乾燥状態における耐久性が確認された。しかし現状では、日本ではまだ使える建物の解体は行われ続けており、選定建築物も失われている。これらの問題を解決するには JIA と DOCOMOMO Japan が協力することが必要不可欠であると強調された。JIA と DOCOMOMO Japan の活動は重なる部分が多く、現在は一般の建築ファンが増えている。JIA の会員は学識経験者や建築家だけであるが、DOCOMOMO Japan は誰でも会員になることができるため、一般の方からの選定建築の提案が増えている。多方面から判別、建築の推薦ができることが強みであり、DOCOMOMO Japan の変わりつつある点でもある。それぞれの強みを活かし、保存活動を行なっていくことが重要視される。

最後に JIA 側から一般市民への参加促進と建築への理解を深める活動を増やしてほしいという意見が出た。住民参加型ワークショップからまちづくりへ参加してもらうことで建築に興味を持ち、結果的に街の保存につながる。このような活動が増えていくことを期待すると同時に、活動を支える役割としても JIA は存在している。主題である JIA と DOCOMOMO Japan の連携強化については、両者とも一般市民にいかに関心を伝えていくか、という同じ課題を抱えており、発信の場を協力してつくることの重要性が再確認された。

3. まとめ

近代建築の保存は過去を守る行為であると同時に、未来の建築を考えるための重要な手がかりであると感じた。設計者の思想や時代背景をどのように継承するかという視点は、設計を学ぶ学生にとって大きな学びであった。また、DOCOMOMO と JIA が異なる役割を担いながら協働している点から、建築は専門家だけでなく社会全体と関わるものであると再認識した。

S04 都市と地方が混在する千葉の食・文化の現状と未来

～農とまちを繋ぐコミュニティから考える～

開催日時：2025 年 11 月 8 日（土） 12:30 ～ 14:00

会 場：千葉県文化会館・大ホール

登壇者：山根正敬 恋する豚研究所（社会福祉法人福祉楽団）

岩山雅子 タンジョウ農場 農場長

野村俊介 良品計画 MUJI BASE OIKAWA 支配人

中村拓志 建築家／NAP 建築設計事務所

磯野智由 建築家／STYLELAB

REPORTER



漆原東子

（千葉大学大学院 修士2年）



セッション冒頭 磯野氏によるセッション内容と登壇者の紹介



磯野氏による農業の現状と、登壇者が今回セッションで紹介する場所の紹介、農業の厳しい現状や千葉の特色について、非常にわかりやすく解説された。

上段：農業の現状について
下段：登壇者が紹介する場所の紹介

1. 企画の意図

多くの人が都市で豊かな食文化を楽しむ一方、その背景にある生産者の実態は十分に知られていない。千葉県は温暖な気候と平坦な耕地、大消費地に近い立地を活かし、農業生産量は全国4位を誇るが、高齢化や後継者不足、都市化に伴う廃業といった課題も抱えている。本企画では、千葉県内で特色ある事業を展開する施設の活動と理念を紹介し、農業に携わる現場の実態に光を当てる。加えて、農業施設の設計経験をもつ建築家・中村拓志氏を招き、食の安全性や健康志向が高まる中での農業の役割、防災や棚田に代表される農地の景観的・機能的価値に触れながら、農と都市をつなぐ未来のまちづくりについて多角的に議論する。

2. トークセッションの概要

本セッションでは、千葉県という都市と農村が隣接する地域特性を踏まえ、農業・福祉・建築の実践者たちが集い、それぞれの立場からまちづくりや地域連携の可能性が語られた。

冒頭では進行役である磯野氏から、千葉県の持つ地理的・産業的特徴について簡単な解説があった。温暖な気候と平坦な耕地に恵まれ、東京圏にも近い千葉県は、農業生産量で全国4位を誇るが、同時に高齢化や後継者不足、都市化による廃業といった課題も抱えている。そうした現状を踏まえ、「農とまちをどう繋げていくか」というテーマのもと、4名の登壇者がそれぞれの立場から実践を語った。

最初に登壇したのは、社会福祉法人福祉楽団「恋する豚研究所」の山根正敬氏。山根氏は、障害者の就労支援と食のブランド化を結びつけた取り組みを紹介し

た。発酵飼料で育てた高品質な豚と、福祉的支援が融合するこの施設では、レストランや精肉の直販なども展開し、消費者との距離を縮めている。特徴的だったのは、福祉を「支援される場」ではなく、働く人が誇りを持てる場と捉えていた点である。ブランディングや建築にもこだわり、デザイン性の高い店舗空間が地域内外の来訪者に強い印象を与えている。

次に登壇したのは、「タンジョウ農場」農場長の岩山雅子氏。広告業界から転身し、37歳で農業の世界に入ったという異色の経歴を持つ岩山氏は、自然との共生を意識した農業のあり方を紹介。隣接する牧場の牛の堆肥を使った無農薬栽培に取り組み、西洋野菜やブルーベリーをレストランに直送している。また、農場敷地内に併設された「ファームキッチン」では、収穫物を活かした料理やスイーツを提供し、農と食の一体的な体験を生み出している。都市農業は「消費者が近いことが最大のメリット」とであるとして地域との繋がりをとても大切にしていることが心に残った。

三人目は、良品計画で地域拠点づくりを担当する野村俊介氏。同社が千葉県大多喜町で展開する「MUJI BASE」の事例を紹介した。廃校となった旧小学校を再利用したこの施設は、観光と生活、地元住民と来訪者が交わる“第三の場”として機能している。野村氏は「地域にとって本当に必要な場とは何か」を問い直



山根氏のスライド。左：恋する豚研究所 右：「支援される場」ではなく、地域産業と福祉を組み合わせる地域を元気にすることを目指す。



岩山氏のスライド。「この地だからこそ！」という強い想いを感じる。「食」の提供を超えた人々の繋がりを感知されるタンジョウ農業の取り組みは非常に魅力的であった。

登壇者の実践を紹介するスライドの抜粋。登壇者それぞれの、その土地や地域の人々に対する強い想いを感じることができた。

しながら、住民と共に運営・改善を重ねていることを紹介した。単なるリノベーションに留まらず、地元住民が日常的に使い、外部の人ともつながる空間づくりは、地域拠点のあり方を再定義しているように感じられた。

最後に登壇したのは、建築家・中村拓志氏。KURKKU FIELDS の地中図書館や Hokoraz などの設計経験をもとに、消費者のためでなくその畑で働く人々を尊敬できる場としての計画について語った。建築にできるのは、空間を通じて人と自然をつなげることであり、耕地の存在が地域の記憶や文化、そして未来の景観形成に寄与することを強調した点が印象的だった。

セッション全体を通じて浮かび上がったのは、農やまちづくりにおける“人と人の関係性”の重要性であった。いずれの登壇者も、事業の根底にあるのは「誰のために、何のために場をつくるのか」という問いであり、その姿勢が地域の信頼や継続性につながっていたのが印象的だった。

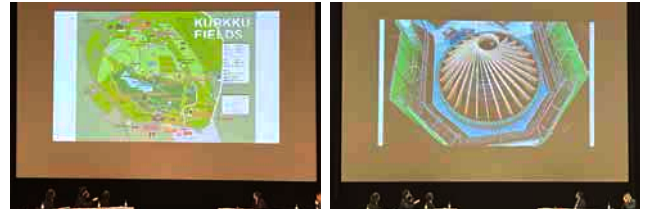
3. 当日の質疑応答

まず最初に、野村俊介氏に対し「MUJI BASE ではなぜ宿泊施設を選んだのか」「採算はどのように取っているのか」という問いが投げかけられた。野村氏は、観光としての“消費される場所”ではなく、地域の暮らしに寄り添い、地元の人々が日常的に立ち寄れる場所を目指した結果として、宿泊と拠点機能を融合させた形になったと説明。また、採算性については、短期的な収益よりも“地域に根付く価値”を重視しており、経済的な持続性は周辺地域との連携を通じて模索していると回答した。

次に岩山雅子氏には「農と建築の関係について、農業の現場からどう感じるか」という質問があった。岩山氏は、建築や空間のデザインが人の心理に与える影響は大きく、農場に訪れた人々がリラックスし、土や食に触れやすくなる設計が重要だと述べた。日常に近い空間であるからこそ、「開かれたデザイン」が信頼や



野村氏のスライド。左：ライフスタイルそのものを提供している企業だからこそできること 右：観光だけで終わらせない工夫を凝らした MUJI FARM の事業内容



中村氏のスライド。左：KURKKU FIELDS のマップ 右：KURKKU FIELDS の計画にマッチした「助け合い構造」というユニークな工法。

興味を生むと強調した。

中村拓志氏はそれを受け、建築家としての視点から補足した。耕作地や棚田は機能だけでなく、風景の一部として人の記憶に残る要素であり、それを建築的にどう保全し、活かしていくかが今後の課題だと述べた。特に都市に近い地域では、農と建築が対立するのではなく、補完し合う形でデザインされるべきだという意見が共有された。

それぞれの応答からは、農や地域づくりにおける“場の設計”と“関係性の構築”の重要性が浮かび上がっていた。質疑応答を通じて、登壇者の活動の裏側にある哲学や悩みが垣間見えたことは、私を含め聴講者にとって大きな学びとなったことだろう。

4. まとめ

今回のセッションを通じて、まちやコミュニティづくりに関わるには、分野を問わず「柔軟で力強い思考と行動」が必要だと強く感じた。登壇者の実践は、最初は特定の人々の暮らしに寄り添いながら、やがて地域全体へと広がっていく。多様な価値観に向き合いながら場を動かすには、意図を持って考え、それを丁寧に実行に移す力が欠かせないと感じた。農とまちを繋ぐ方法にもさまざまなカタチがあることを知り、改めて「一筋縄ではいかないまちづくり」に魅力を感じた。成果だけでなく、その背景にある想いや工夫に触れたことが、私にとって大きな学びとなった。また、全体を通じて、各登壇者の取り組みは、経済や制度の枠を超えて、人と人との関係性や生活に根ざした価値創造を目指すものであった。都市と地方が混在する千葉の地で、農とまちを繋ぐ「新しいコミュニティのかたち」が提示されたセッションとなった。

貴重なお話を聞かせていただき、誠にありがとうございました。登壇者の皆さまの率直な語りや実践に込められた思いから、まちづくりの本質について深く考えるきっかけをいただきました。このような学びの機会に参加できたことに、心より感謝申し上げます。

S05 地域づくりと建築家の新たな活動

開催日時：2025 年 11 月 7 日（金） 14:10 ～ 15:40

会 場：千葉県文化会館・大練習室

登 壇 者：伊藤孝仁 建築家／AMP/PAM(アンパン) 代表

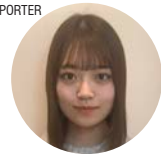
栗生はるか 一般社団法人せんとうまち代表理事／文京建築会ユース代表

澤田圭司 保育士、防災士／文京区議会議員

田島則行 建築家／テレデザイン代表／千葉工業大学教授

若林拓哉 建築家／ウミネコアーキ代表

REPORTER



平瀬美咲

(千葉工業大学大学院 修士2年)



当日の会場。参加者は市民や学生なども多く、熱気溢れる議論が展開された。

1. 企画の意図

本トークセッションは、社会や地域の変化と街のあり方との関係をあらためて問い直すことを目的としている。私たちの暮らす街は社会の状況を映す存在である一方、高齢化や空き家の増加、コミュニティの希薄化など、現代的課題に十分に答えきれていない場面も多く見られる。こうした中で、近年の建築家は建物を設計・建設する役割にとどまらず、地域づくりや街の再生に主体的に関わる存在へと領域を広げている。本セッションでは、建築をつくることに限らない建築家の実践や、建築を通じて地域と新たな関係を編み直す試みを紹介し、あわせて、地域住民、行政、研究者、議員といった多様な立場の参加者を交え、街づくりを一部の専門家の課題としてではなく、社会全体の営みとして捉え直し、これからの地域と建築の可能性を多角的に考える場とすることを企画の意図としている。

2. トークセッションの概要

冒頭、本セッションの司会を務めた若林拓哉さんより、登壇者の紹介が行われた。続いて、伊藤孝仁さん、栗生はるかさん、澤田圭司さん、田島則行さん、若林拓哉さんの5名が、それぞれ自身の活動や実践を軸に、地域づくりに対する考え方や具体的な取り組みについてプレゼンテーションを行った。

伊藤孝仁さんは、「都市を耕す」・「他者と出会う」・「庭と都市をつなぐ」という三つの柱を掲げ、自身の実践を紹介した。大宮の歩道空間を舞台に、緑化された滞在空間を生み出す社会実験を例に、植物を媒介として沿道の人々が水やりに関わることで、自然に地域との接点が生まれていくプロセスを示した。均質で滑ら

かな都市空間ではなく、出来事が絡まりやすい状態へと変化していく都市のあり方を提示し、人と人、活動と場所が偶発的につながる可能性を示す提案がなされた。

栗生はるかさんは、「まちの豊かさとは何か」という問いを出発点として活動が続けてきた経緯を語った。まちつぎをキーワードに、記録や調査を丁寧に積み重ね、それらを基にした展覧会の開催などを通して地域と向き合ってきた実践が紹介された。地域の人々自身が主体となり、まちの魅力を次へとつないでいく担い手を増やすこと、そしてすでに地域に存在している価値あるものを再発見し、活かしていくことの重要性が、具体的な活動とともに提案された。

澤田圭司さんは、住民が主役となるまちづくりを自治デザインとして捉え、自分たちの街を自分たちでつくるという意識を持つ人が少ない現状を課題として指摘した。東京都文京区の藍染大通りを例に、町の内と外をつなぐ公共空間の重要性や、その空間を核とした地域づくりの可能性について紹介した。古くから地域に根差してきた通りを起点とし、人々の関係性を育むコミュニティづくりの実践が示された。

田島則行先生は、これまで手がけてきた場づくりの活動として団地の活性化プロジェクトなどを挙げ、建築を一つのコミュニティのためのアセットとして捉える設計姿勢について語った。今後の日本社会においては、既存の建築や資源を活用したコミュニティ形成がより重要になると述べ、建築が人と人をつなぐ力を持つことを前提に、人のつながりが広がっていくようなデザインを実践してきたことが紹介された。



澤田圭司さんが自身のプロジェクトの紹介をしている様子。

若林拓哉さんは、私設公共性が生み出す地域の風景を軸に、不動産や設計など複数の領域を横断しながら行ってきた活動を紹介した。これまでの事例を通して、暮らしの中に挑戦しやすい場を挿入することの意義や、「ローカル・ダイニング・キッチン」という新たなレイヤーを重ねる試み、小商いと暮らしが共存することで育まれる開かれた庭のあり方が提案され、地域における新しい公共性の可能性が示された。

3. 当日の議論

プレゼンテーション終了後、登壇者・参加者を交えたディスカッションが行われた。活動のフィールドや手法はそれぞれ異なるものの、共通していたのは、ストリートや空き家といった既存の社会的資源を単に利用する対象としてではなく、日常的にメンテナンスし、ケアしていく段階にいかに関与できるかという視点であった。

建築家は設計行為にとどまらず、地域の人や活動をつなぐファシリテーターのような役割を担うことで、より社会的に貢献できるのではないかという議論へと発展していった。

また、専門家と非専門家、あるいはプロと素人といった従来の区分は、地域づくりの現場では必ずしも有効ではないという意見も示された。地域には表に見えていないだけで、潜在的に行動力や関心を持つ人々が数多く存在しており、自由に動き回る個人の関与そのものが、地域住民にとって「自分も参加してよい」という可参加可能性を示すサインとなる。そうした個人の振る舞いは、周囲の住民の主体性を引き出す装置として機能し得ることが共有された。

一方、日本の社会においては、住民が自発的に立ち上がり、継続的に関わるための仕組みが十分に整っていないという課題も指摘された。そのため、まちづくりには正解が一つではないことや、自分自身がどのような立場で関わり得るのかを住民が学び、理解できる場を設けることの重要性が強調された。

議論はさらに、まちを固定的な構造物としてではなく、生き物のように捉える視点へと広がっていった。都市も人間と同様に浮き沈みを繰り返しながら変化してい

く存在であることを前提としたとき、数値や成果が見えにくいコミュニティ形成をどのように評価すべきかという問いが投げかけられた。

道路や空き家といった半公共的に使われる空間は、完成された状態を目指すものではなく、芽を育てている途上の段階にある。その中で建築家が地域にどう入り込み、適度にかき混ぜ、変化を促していくのが重要であるという認識が共有された。また、これまで遠い存在として捉えられがちだった政治や自治に対しても、空間を介して関わることで関心を持つきっかけを生み出せる可能性があることが述べられ、議論は今後の実践に向けた示唆を含みつつ締めくくられた。



若林拓哉さんが自身のプロジェクトの紹介をしている様子。

4. まとめ

扱うテーマや立場は異なりながらも、参加者の根底には共通する姿勢があることが確認された。近年、建築家が向き合う対象は、従来の建物の設計にとどまらず、空き家やストリート、さらには地域活動そのものへと広がっており、建築家は社会の多様な領域に関与する存在へと変化しつつある。一方で、行政主導のまちづくりにおいては、住民が主体性を持ちにくく、自分がまちにどのように関わるべきかという解像度を得られないまま、仕組みの中に組み込まれてしまう状況が続いている。

こうした文脈の中で重要だと示されていたのが、メンテナンスやケアという視点であった。古くなった場所の手入れや、日常的な小さな活動を積み重ねることで、人は自分を取り巻く環境に身体的に関わり直し、地域に対する主体性を少しずつ取り戻していく。その延長として、作ることを建築の中心に据えるのではなく、新築でさえも環境を治し、関係性を編み直すためのケアとして捉える思想が共有された点は印象的であった。

最終的に、建築家は建物の設計に閉じた職能ではなく、地域をケアし、人々をつなぎ、街を継続的に支える存在へと役割が拡張しているという認識が共有された。一つ一つのプロジェクトの完結性よりも、時間をかけて地域に関わり続ける姿勢こそが、これからの建築家に求められているのだと感じさせる議論であった。

S06 ケアと建築

開催日時：2025 年 11 月 8 日（土） 14:15 ～ 15:45

会 場：千葉県文化会館・大ホール

登壇者：比嘉武彦 kw+hg architects

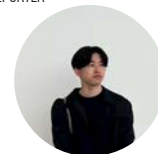
山崎健太郎 山崎健太郎デザインワークショップ／工学院大学教授

林恭正 ArchTank／福祉と建築 副代表

飯田大輔 社会福祉法人 福祉楽団 理事長／恋する豚研究所

山田あすか 建築計画研究者／東京電機大学

REPORTER

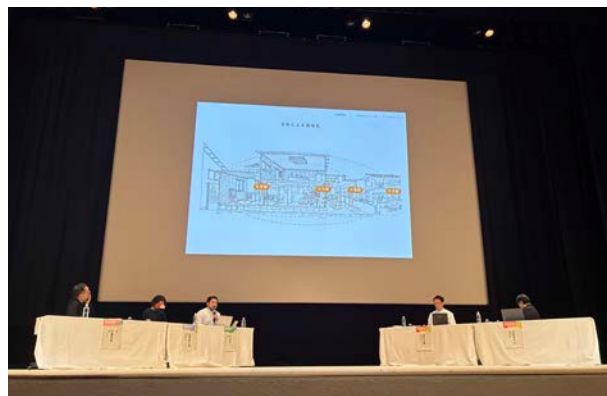


川上拳汰

（千葉工業大学大学院 修士2年）



当日の会場には市民や学生など幅広い層が参加し、活発な意見交換が行われた。



林恭正氏（ArchTank／福祉と建築 副代表）によるプレゼンテーション。

1. 企画の意図

近年、主要な建築賞において福祉施設の受賞が相次ぎ、福祉建築への社会的関心の高まりがうかがえる。若手建築家が従来あまり扱われてこなかった福祉分野に積極的に関わり、福祉関係者側にも新たな協働への意欲が見られる点が特徴である。機能優先で地味と捉えられがちだった福祉施設は、地域に開かれた構成や他用途との複合により「ケアの社会化」を体現する場へと変化しつつある。本企画は、こうした動向を背景に、インクルーシブな社会を目指す中での「ケアと建築」の意味と可能性を議論することを目的とした。

2. トークセッションの概要

本トークセッション「S06 ケアと建築」では、5名の登壇者が、ケアという言葉の背景、ケアが建築にどのように現れるか、また建築がケアをどのように支え得るかについて、実践と理論の双方から議論が行われた。

冒頭、司会の比嘉武彦氏（kw+hg architects）は、近年「ケア」という語が広く使われる一方、その意味が人によってずれていることを指摘した。1982年にキャロル・ギリガンが『もう一つの声』を著し、ケアが新自由主義的な利益優先社会への対抗軸として語られてきた経緯を説明した。ケアは未来を考えるうえで本質的な概念であり、それを建築と交差させることで新たな視点が得られると述べた。

山崎健太郎氏（山崎健太郎デザインワークショップ）は、沖縄の就労支援施設、緩和ケアのホスピス、デイ

サービスとカフェ等を併設する複合施設の三事例を紹介した。沖縄の就労支援施設では、公園前に移転した結果、地域の子どもが放課後に自然に入り込み勉強をしている様子や、利用者それぞれが「サボる場」、「居着く場」を見つけている姿が見られたと述べた。ホスピスでは、既存樹木を残し、廊下幅を大きく取った計画を示し、「悲しんでもよい場所」として運用されていることを説明した。施設竣工時には地域の人々が集まり歌い踊ったことに触れ、設計時には想像しなかった使われ方や関わりが生まれることを強調した。

林恭正氏（ArchTank／福祉と建築 副代表）は、建築設計と福祉領域を横断する活動を行っていると述べ、事例として福祉施設の庭の改修や、多世代複合施設「ライフの学校六郷キャンパス」などの設計を紹介した。子ども、高齢者、居住者など異なる生活サイクルが重なり合う断面を計画上の焦点にしていると説明した。また、店舗兼住宅の改修例では、玄関土間を住宅と店舗の間に配置し、距離によって人の領域意識が変化するという研究を参照しつつ設計したと語った。空間が人の行動や関係性を変える可能性を示し、老朽化建築の用途転換や運営課題にも建築側が関与する必要性を述べた。

飯田大輔氏（福祉楽団／恋する豚研究所）は、千葉・埼玉を中心に展開する法人の取り組みを紹介した。特養・ショートステイ・保育所・認知症デイ・障害者通所施設などを一体化した大規模多機能拠点、空き店舗や団地商店街を改修した地域拠点、障がい者が月給



飯田大輔氏（福祉楽団／恋する豚研究所）が、地域に開かれた福祉施設の実践について語る様子。

制で働く「恋する豚研究所」、その隣での農作業拠点、児童養護施設・グループホーム・児童相談所出張所などを複合した施設について説明した。これらはいずれも塀やフェンスを設けず、地域に対して開かれた運営を行っていると言った。一方で、高齢者施設での外部侵入事件を受け国から「塀の設置」を求める通知が来るなど、「開くこと」と「安全確保」の狭間で葛藤が生じることも言及した。

また、介護・ケアの本質を「生活を整えること」と位置づけ、食事・睡眠・排泄・清潔など日常生活行為を整えることが心身を支えると述べた。障がい者のために「色で計量できる秤」を用意するなど、働きやすい環境をつくる工夫がケアそのものだと言った。加えて、福祉施設において新鮮な空気・日光・臭気の管理など基本的な環境条件を軽視してはならないと指摘した。

山田あすか氏（東京電機大学）は、公共施設は本質的にケアを担っているという立場から、X 軸に活動・行為、Y 軸に利用者を置いたマトリクスを提示し、パブリックからプライベートまでのグラデーションを説明した。プライベート領域の一部を「住み開き」などでゆるやかに開く動きが commons 的場を生むと言った。

さらに、ドイツの「多世代の家」制度を紹介し、民家規模の小拠点、公民館併設型、複数の事業体が入る施設など多様な形があると説明した。これらは地域の課題やリソースをもとに多世代の関係性を生み出す場として機能しているとした。一方で、日本にも類似の場は多数あるが制度的な枠組みがなく、把握しにくい状況だと述べた。また、建築が人の行動を制御し差別構造を生む可能性に触れ、福祉施設の内部にケアを閉じ込めてしまう構造を問題視した。

討議では、制度と実践のずれ、開放性と安全性、地域エンパワーメント、小規模な「私たち」の単位でケアを引き受けるあり方などが議論された。

林氏は、地域がケアに関わる回路を建築でつくる重要性を述べ、飯田氏は、児童相談所の定員超過や「死に場所」の不足など、具体的課題が自身の活動の動機であると説明した。山崎氏は、建築家は余計な造形的主張ではなく、衝動的に現れる実践者のケアのあり方を支える枠組みづくりが重要だと述べた。

セッション全体を通じて、ケアは専門領域に閉じない広い実践であり、建築はその媒介として、開かれ方、半透性、領域の重なり、想定外の使われ方などを通じてケアを支える可能性が確認された。

3. まとめ

本セッションを通じて、ケアとは特定の施設や専門職に限定される行為ではなく、生活や社会のあり方そのものに関わる広い概念であると感じた。福祉施設はこれまで、機能や制度を内包する場として捉えられがちであったが、今回の議論では、建築が人と人との関係性や距離感をどのように形づくるかが示されていた。空間の構成や境界のつくり方は人の行動や心理に影響を与え、それが包摂や排除につながる可能性を持つ。建築は中立な器ではなく、社会の価値観を体現する装置であるという認識が重要だと感じた。

また、ケアが見えにくい場所に押し込められてきた背景には、安全や効率を優先する制度的要請がある一方で、ケアを日常から切り離してきた社会の姿勢もあったのではないかと考えさせられた。ケアを特別な行為として隔離するのではなく、地域や生活の延長として捉え直す視点は、今後の公共建築や地域施設を考える上で重要である。

建築に求められるのは、完成時の明快な答えや強い造形ではなく、人々の関係性の変化を受け止める余白や柔軟性ではないだろうか。本セッションは、建築がケアを直接担うのではなく、ケアが立ち上がる土壌を整える役割を持ち得ることを示しており、その可能性を改めて考える機会となった。

S07 木材の非生産県における地域木材活用のための社会の仕組みづくり

～安定した木材生産にむけた千葉県の林業と建築家の連携～

開催日時：2025 年 11 月 8 日（土） 14:15 ～ 15:45

会 場：千葉県文化会館・小ホール

登壇者：鈴木晋 建築家／アルキテック設計室

福田彰 千葉県農林水産部森林課 森林経営管理室長

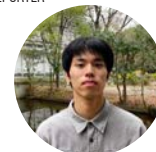
竹ノ内秀和 千葉県森林組合安房事業所長

坂井こころ ナトゥアリーベ明石屋有限会社 後継予定者

小暮亮太 建築家／小さな暮らし研究所

森田敬介 建築家／森田建築設計事務所

REPORTER



柴田育朗

(千葉大学大学院 修士1年)



会場には市民や学生の姿も多く、終始活気に満ちた議論が展開された。

1. 企画の意図

本企画の目的は、木材利用促進策が「生産県」と「消費県」という二つの視点で成り立っている点に着目し、生産量が少ない地域でも木材を活用できる仕組みを探ることである。千葉県のような木材非生産県では、地域木材の活用は環境保全や地域産業の維持にとって重要であるにも関わらず、その実態や課題は十分に共有されていない。そこで、林業に関わる多様な立場の方々を集め、地域木材の持続的な活用に向けた課題整理と今後の方向性を考える場が企画された。

2. トークセッションの概要

「木材を使いたいけれど、どこにあるのか分からない」、「地元の木を使おうとすると、かえって高くつき、納期も読めない」。そんな都市部の建築家が抱える根深いジレンマを正面から扱ったトークセッションが始まった。舞台は森林率が全国平均の半分ほどで、都市化が進んだ千葉県。中でも北西部は森林率がわずかに4%。このような中で行政、林業、製材、建築という、木材流通の上流から下流までの関係者が一堂に会し、都市近郊の森をどう持続させるかを議論した。

まず、千葉県森林課の福田彰氏は、「県内の森林の約9割は私有林で、所有者が非常に細分化されているため、大規模な計画伐採や計画的な森林管理が難しいという構造的な問題がある」とし、また、「かつて良材で知られていたサンプスギが病気や度重なる台風被害の影響で大きく傷み、伐採された木のうち構造材として使えるのは全体の約3割程度にすぎないという現実がある」と述べた。千葉の「森」が抱える地理的・気候的・所有構造的な複雑さが浮き彫りになり、会場には緊張感が伝わった。

都道府県	森林面積	人工林面積	国土面積	森林率	人工林率
1 北海道	688,271	111,584	800,124	86%	14%
2 青森県	347,463	154,040	640,809	54%	24%
3 岩手県	424,380	176,209	636,239	67%	25%
4 秋田県	178,323	89,302	276,175	65%	32%
5 山形県	148,400	48,511	215,729	69%	22%
6 福島県	76,817	34,825	218,402	35%	16%
7 宮城県	94,248	38,231	241,811	39%	16%
8 茨城県	1,088,951	442,387	1,538,136	71%	29%
9 栃木県	25,024,810	10,060,402	37,297,134	67%	27%

※1 国土面積は、全国町村別面積集計資料(平成25年)による。
※2 千葉県及び北西部の森林率は、北西部を軸として算出した。

近隣都県の森林率・人工林率



千葉県の森林率



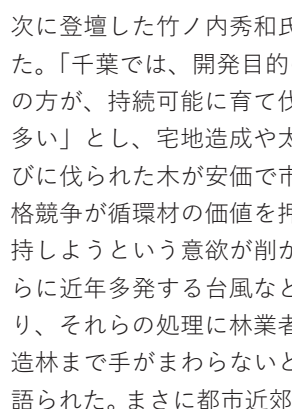
森林現況の面積割合



サンプスギ非赤枯性溝腐病



台風被害林



次に登壇した竹ノ内秀和氏は、現場の最前線から語った。「千葉では、開発目的の伐採による木＝『開発材』の方が、持続可能に育て伐る『循環材』より圧倒的に多い」とし、宅地造成や太陽光発電所などの開発のたびに伐られた木が安価で市場に流れるため、安易な価格競争が循環材の価値を押し下げ、結果として山を維持しようという意欲が削がれてしまうと指摘した。さらに近年多発する台風などで倒木や被害木が増えており、それらの処理に林業者が追われると森の管理や再造林まで手がまわらないという、時間と労力の限界も語られた。まさに都市近郊林業の深刻な現実であった。

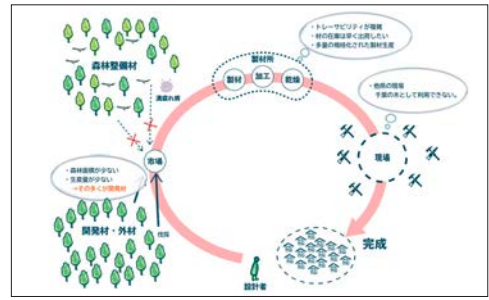
ここで一度、現場に焦点が当てられた。鈴木晋氏が「千葉の材木店『ナトゥアリーベ明石屋』さんの『建築用材』の売り上げは、全体の約1割にすぎない」と紹介すると、会場からは思わず声が漏れた。残りの9割は、輸出用梱包材や企業向け資材が占めているという。建築用材は品質要求が高く、乾燥や加工に多くの時間と手間を要するうえ、安定供給が難しい。そのため市場に出しにくいという現実がある。この状況は千葉県産材が建築分野でなかなか定着しない理由を端的に示していた。こうした厳しい現実が語られる中、「ナトゥアリーベ明石屋」を継ぐ決意を固めたばかりの坂井こころ氏が登壇した。坂井氏は、幼少期から木に囲まれて育ち、「地図に残る仕事がしたい」という思いを常



企業向け資材 販売



輸出入 木材梱包



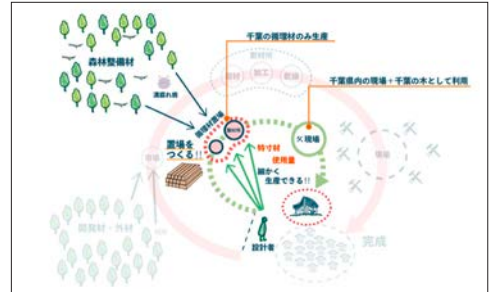
現在の木材流通イメージ



ナトゥアリーベ明石屋の取り組みの現場



shopbot を使って制作したスツール



目指す木材流通イメージ

に抱いてきたと語る。そして、大量の構造材を安定的に供給できなくても、木の魅力を別の形で伝える道はあると前向きな可能性を示した。具体的には UV プリンターや NC ルーターといったデジタル加工技術を導入し、木材に写真やイラストを印刷したり、複雑な形状に削り出したりすることで、家具や内装、小物・インテリア用品などの付加価値の高い製品を生み出すというアイデアである。「量ではなく、アイデア、そしてストーリーで勝負する」。その言葉に込められた坂井氏の前向きな姿勢は、会場に強く印象づけられた。

建築家の立場では小暮亮太氏が率直に語った。「僕たちも千葉県産材を使いたい。しかし実際に使おうとすると、どこに頼めばいいかわからない、いつ手に入るかもわからず、工期が決まっている現場では使いづらい」。その言葉に多くの設計者が共感し頷いた。その後、小暮氏は解決策を提示する。「地域にストックヤードを設け、乾燥済み木材を一定量プールする」という提案だ。これにより建築家は実物を見て木を選ぶことができ、製材所側は急な注文に右往左往せずに済む。加工・乾燥の余裕を持たせることで、品質の安定と供給の見通しを同時に確保するというアイデアに、林業側・製材側の登壇者も深く頷いた。

さらに鈴木氏は、「量や納期をただ要求するだけではなく、設計段階の早い段階から必要量や時期を共有する『事前連携』が不可欠だ」と繰り返した。川上（山・林業）と川下（建築・設計）が顔を合わせ、情報を共有することで、予測可能な流通と森林管理のサイクルが生まれる。そのためのネットワークづくりが重要だと強調された。

議論の終盤には、千葉のような木材非生産県だからこそ、「いつでも安く大量に」という大量供給モデルを追いかけるべきではない、という共通認識が育ち始め

た。木の節や曲がりを「欠点」ではなく「個性」や「味」としてデザインに取り入れ、さらにその木が「森を守るために伐られた循環材である」という背景を施主に伝えることで、価格以上の付加価値を示せるのではないか。そんなリアルで誠実なストーリーが地域材活用の鍵になるかもしれない。会場の空気には、その信念が静かに、しかし強く共有された。

3. まとめ

今回の議論を通じて、千葉県の木材利用の課題は「量の不足」よりも、林業・製材・建築の三者が互いの実情を十分に把握していないことに由来していると実感した。本当は「使いたいのに使えない」・「供給したいのに届けられない」という思いをそれぞれが抱えているにもかかわらず、その状況が共有されていなかったことが浮き彫りになった。

その一方で、同じ場で課題を出し合ったことで、「千葉では大量供給のモデルを求めるべきではない」という共通認識が生まれたのは印象的だった。曲がりや節といった木の個性をデザインに生かすことや、山のストーリーを施主に伝えることで価値を高めるなど、少量だからこそできる使い方があると気づかされた。また、建築家が早い段階で必要量を共有し、林業・製材側が乾燥材をストックする仕組みなど、実現可能な提案が自然と生まれたことから、立場を越えた対話の重要性を改めて実感した。

このセッションを通じて、「できない理由」を並べるのではなく、「どうすればできるか」を一緒に考える姿勢が、都市近郊の森を未来につなぐ鍵になると学んだ。木を資源としてだけでなく、一つひとつの価値や物語を尊重しながら使い切る視点を、これからも大切にしていきたい。

開催日時：2025 年 11 月 7 日（金） 14:10 ～ 15:40

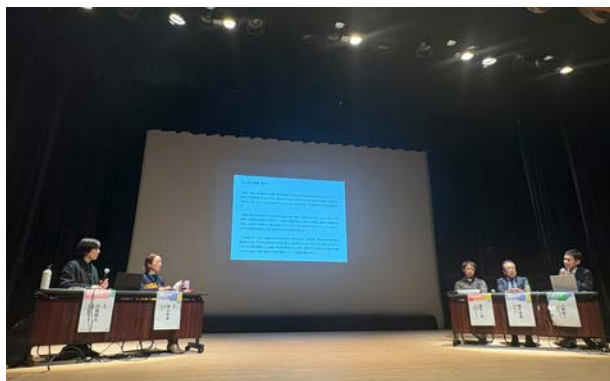
会 場：千葉県文化会館・小ホール

登壇者：楠見晴重 地盤工学研究者／関西大学特命教授
 藤井一至 土の研究者／福島国際研究教育機関上級研究員
 山崎祐二 竹中工務店 技術研究所 主任研究員
 川島範久 建築家／川島範久建築設計事務所／明治大学准教授
 常山未央 建築家／Studio mmm／HOLES

REPORTER



副島碧
 （千葉工業大学大学院 修士2年）



ディスカッション中の様子。終わりが惜しまれる様なディスカッションとなった。

1. 本セッションの意図

本セッションでは、「土」と「水」といった見えない環境要素に建築や都市がどのように関わり、再生的な関係を築いていけるのかについて多角的な議論が行われた。地盤工学・生態建築・都市環境・企業による再生実践といった多様な立場から、地中や水循環をめぐる新たな建築的視点が提示された。

2. 各セッションの概要

常山未央氏は、土壌改良で自然を再生させる造園家との出会いがきっかけで菌糸のネットワークや土中の生態系の豊かさに感動し、「建築もその上に立っているのにその世界を知らなかった」という気づきを得たと言う。そこから自宅前のコンクリートで覆われた駐車場を壊し、土を戻し、水や生態系の循環を取り戻す実験を行った。その結果、気温の低下や食べ物のサイクルという生態系がそこに生まれた。都市の中でもこうした「小さい土の回復」が可能では無いか、と話していた。この経験を元に「土に変える素材」「循環型の建築」を考えるようになった。海外ではかなり注目されている分野で、すでに研究が進んでいるものの、現状はまだ議論段階に留まっている。

これに対し、川島範久氏は、土に変える素材を使い住民が共にメンテナンスをする建築を実現することで、新たな都市建築のあり方が見えてくるのではないかと付け加えた。

藤井一至氏のプレゼンテーションは、アフリカのシロアリ塚など自然界の構造物を例に挙げ、「うまく回っている自然の仕組みを人間社会はどのように取り戻せるか」という問いの提示から始まった。



5人の登壇者によるプレゼンテーションの様子。各々違う分野のプレゼンテーションは非常に興味深く、我々に新たな視点を与えてくれた。

上段左：常山氏、上段右：川島氏、
 中段左：藤井氏、中段右：楠見氏、
 下段左：山崎氏のプレゼンテーション

次に、近代以降の「環境」や「持続可能性」に関するスローガンの遍歴を振り返った。「生物多様性」・「SDGs」など様々な言葉が誕生したものの、本質的な行動や価値観はあまり変わっていないのではないかと批判的に述べた。つまり、社会は「正しい言葉」を更新し続けているが、環境破壊の構造は変わっていないのではないかという指摘である。

ここから「土」とは何か、という話に移る。土は、「単なる物質ではなく、生き物と非生物が協働して出来る生命的な存在」であると強調した。ミミズや微生物などがゴミを土に変えることで生態系を維持しているため、土のシステムは持続的で自律的な生きた存在であるのだ。しかし、現代では土は耕作や化学肥料によって土壌が劣化している。「畑の健康＝土の健康」だった時代とは違い、都市生活者の活動までもが地球環境に影響するようになっていく。土は文化・気候・生態を媒介する存在である。従って、土の健康を守る責任は農家だけでなく、都市に住む私たち全員にあると述べた。ただ、土壌改良の価値観が時代ごとに変化したことは土の思い方の違いであり、どれが絶対的に正しいというわけではないとも述べた。結論として「生物や環境全体のプロセスを遡って考える共同的な視点が必要だ」と強調。新しいポジティブな方法で土と共に生きる仕組みを再構築するべきだと締め括った。



会場の様子。多くの人が集まり議論を見届けた。

三つ目のプレゼンテーションでは、楠見晴重氏が京都と地下水の関係を論じた。京都は古くから豊かな地下水に支えられてきた都市であり、その水脈は生活文化や産業、宗教儀礼にまで影響を及ぼしてきた。今でも井戸や川を由来とする地名が多く残っており、水と共にある都市文化が継承されている。

また、京都をかたちづくっている京都盆地についての解説も行われた。京都盆地は南北に約 32km、東西に約 12km ほどの盆地である。過去 200 万年の間に 4 ～ 5 回海に沈んだ時期があり、その堆積層が地下構造を作っているという。琵琶湖からの水は地表だけではなく地下でもつながっており、盆地全体で地下水が巡回している。ここに雨水の約 1/3 が浸透し、地下水を形成しているのだと述べた。このことから、京都は「川の都市」ではなく、「地下水の都市」であり、この目に見えない地下水が古くからの文化・産業・生活を支えてきたと強調した。地下の地質と人間の営みの関係を可視化する研究が続けられている。

四つ目のプレゼンでは、竹中工務店の山崎祐二氏が土壌汚染の現状と再生に向けた取り組みを紹介した。古くからある環境問題の一つが土壌汚染である。世界中で問題視されており、日本でも推定二万ヶ所に潜在的汚染があるという。山崎氏は、汚染対策を「環境リスクの処理」ととどめず、「地域再生のプロジェクト」として捉える視点を提示した。

土壌汚染を環境資源と捉え直し、地中熱や排熱の利用、微生物による浄化促進、雨水や地下水の制御利用といった、「浄化＋再利用」の仕組みを都市計画に組み込む技術開発を進めているという。汚染をマイナスな要素ではなく資源として再定義し、技術・設計・社会の連携によって環境再生型の都市づくりを実現させたいと語った。

3. ディスカッション

後半のディスカッションでは、登壇者全員が「土と水を建築・都市とどう接続できるか」をめぐって意見を交わした。

これまでの都市は水を排除し、土を封じ込める設計思想に基づいてきたが、今後は水を還流させ、土を呼吸させる構造へと転換する必要があるとの共通認識が示された。さらに、地中の環境を把握し、地域固有の水循環を損なわない建築設計を行うこと、強さだけではなく「環境への応答性」を備えることが求められるとも示された。モデレーターを務めた川島氏からは、「土や水が特別なテーマとして扱われるのではなく、建築の前提として語られるべきだ」というまとめが示され、本セッションの意義が強調された。

4. まとめ

私は、本セッションの中で「あえて、ではなく、普通に土の話がされるようになってほしい。」という藤井氏の言葉が強く印象に残った。「環境」について様々な議論が行われているのにも関わらず、土の話が出てくることは少ないのではないだろうか。人類は古くから土と水に支えられて生きてきたと言っても過言ではない。しかし現代ではコンクリートの利用や新素材の誕生などによって目を向けられないことが増えてしまった。多大な恩恵を受けてきたにもかかわらず、近代以降その関係を手放してきた。今こそその必然性を問い直す必要があるのではないだろうか、と考えた。

本セッションを通して、建築を「地表面上の構築物」としてではなく、「地中を含む環境全体の関係性」として捉える視点の重要性を考えさせられた。土と水は、建築の外部にある素材ではなく、建築そのものを支え、呼吸させる生命的基盤である。古くから土と水と共に暮らしてきた人類がその当たり前を忘れていている存在でもある。目に見えているようで見えていないものにこそ、着目するべきではないだろうか。その様な気づきを与えてくれた、そんなセッションであった。

S09 建築とテクノロジーの関係を問い直す

～若手建築家が見据える設計の未来～

開催日時：2025 年 11 月 8 日（土） 10:00 ～ 11:30

会 場：千葉県文化会館・大ホール

登 壇 者：今井公太郎 建築家／東京大学生産技術研究所教授

荒木美香 構造家／Graph Studio／関西学院大学准教授

久保田愛 建築家／久保田愛一級建築士事務所／

東京大学生産技術研究所今井研究室

千種成顕 建築家／ICADA

高野洋平 建築家／MARU. architecture／

千葉大学大学院工学研究院准教授

REPORTER

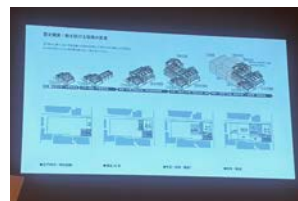


奥富 樹

（千葉工業大学大学院 修士1年）



当日の会場。登壇者のプロジェクト紹介の後、ディスカッションが中心となった。
左から順に、今井さん・高野さん・久保田さん・千種さん・荒木さん。



一括りにデジタル技術と言っても、それぞれがかなり異なる視点で建築へのアプローチをしており、その間に生まれる新たな議論もあり、興味深いセッションであった。

1. 企画の意図

建築は最も古く、かつ新しい技術であり、素材や構法の変遷を経て常に時代のテクノロジーと呼応してきた。近年、AI や BIM、3D CAD、3D プリンタなどのデジタル技術が急速に進展し、設計と製造の在り方を刷新している。変化が絶え間ないこの状況で、建築家は技術を単なる道具ではなく思考や創造をかたちづくる「環境」と捉え、その可能性と課題に向き合う必要がある。本セッションでは、デジタル技術の普及期にキャリアを築き、構造設計や教育に携わる若手建築家を登壇者に迎え、生成 AI や BIM がもたらす思考の変容、設計と製造の新たな関係、技術と創造性の接点について多角的に議論し、建築デザインの未来を展望する。

2. トークセッションの概要

本セッションでは、生成 AI や BIM がもたらす思考の変容、設計と製造の新たな関係、技術と創造性の接点について多角的に議論が行われた。登壇者は、時代の技術と移り変わる設計手法、思考の環境であるテクノロジーをどう捉えるかをテーマに自身のプロジェクトを解説した。

荒木美香さんは、「オーゼティック構造のパーゴラ」を中心に、かつての球体や HP シェルなど、数字の拘束から解放された新たなシェイプの創造性や、数式で表せないものもコントロールできるようになる可能性について語った。

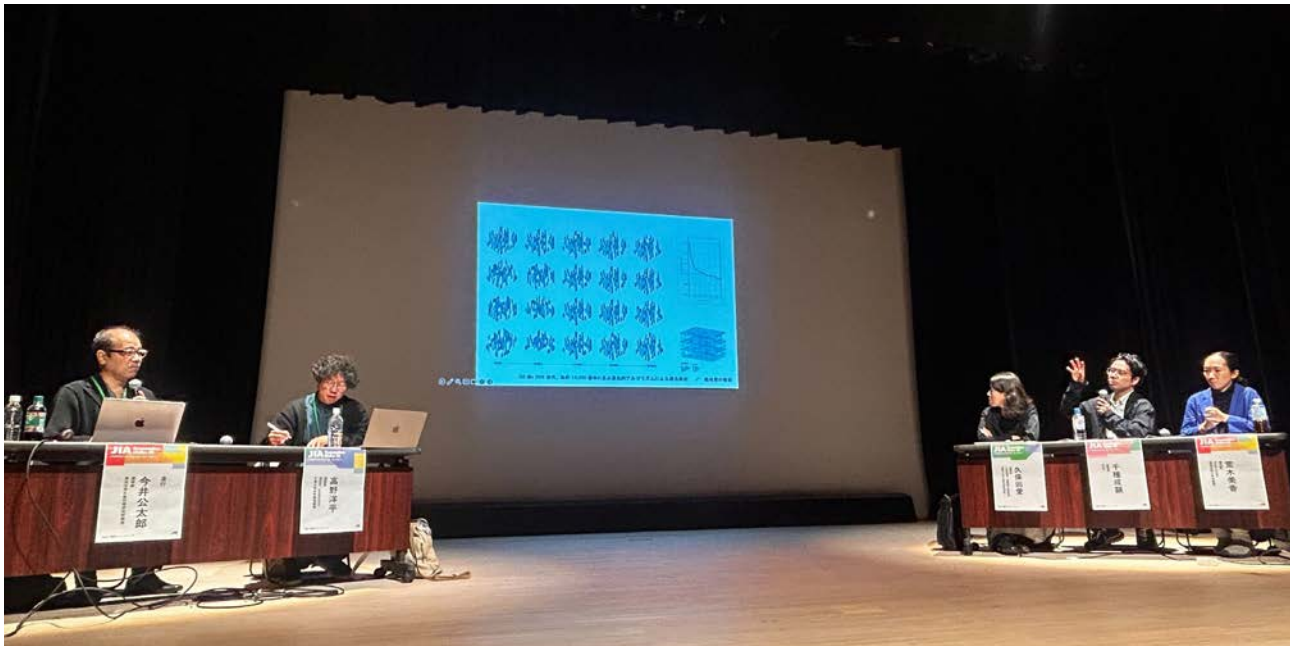
千種成顕さんは、小規模コーポラティブハウス「西永福ハウス」での躯体費最適化と遺伝的アルゴリズムを設計手法に持ち込んだプロジェクトを語る。

久保田愛さんは、「PENTA シリーズ」のプロジェクトをもとに、創造物が複雑化した時に技術をどう使うか思考を語る。数字を超えた技術が感覚の共有手段であることにも視点を向けていた。

高野洋介さんは、「花重リノベーション」のデジタル技術の物象化した事例とともに、このプロジェクトで仕口が時代の表象であったことからデジタルにおいて時間軸的パラメータをどう扱うのか議論された。

議論の1つ目のトピックは、「デジタル技術が効率やオートメーションではなく、思考として活用されるものが見受けられるがどの部分で適用されるべきか」であった。

かつて、建築は形式や再現性において数学とは切り離せないものであった。直感的・感覚的なものの表現は困難である。それがコントロールできる可能性をデジタル技術が担うのではないか。模型では起こせるのに図面にはならないシェイプ、思考段階では見えてこない経済性、ツールに影響される設計においてモノの解像度がデジタルとの往復運動によって上がるのではないかといった意見が交わされた。



千種さんのプレゼンテーション。登壇者同士の質疑を経て、デジタル技術に対する認識が深掘りされていた。

2つ目のトピックとして、「機械が判断をし始め、AIと人間の境界線はどこに引くべきか」について議論された。現在、AIに任されている最適化は、数多くの情報から選ばれた全体のごく一部であり、何を最適化するのを選ぶのは人間である。例えば、設計プロセスにユーザーが介入してくると設計者の役割が複雑化してくるが、デジタル技術を用いてバリエーションを持たせ、パラメトリックな対応を行うことでこれが解決できるのではないか、さらには、人間の感覚が無数・複雑にあるなかで問題ごとの最適化には危うさが潜んでいる、といった意見が挙がった。

3つ目に「物質と身体を、デジタルを使ってどう再定義できるか」について議論が行われた。身体とデジタルではスケールに差異が出る。NCは0.01mmの精度であるのに対して、建築は数十mmの差が生まれる。花重のプロジェクトでは、NCで削り出した部材を組んだ物に合わせて基礎が作られるという通常のプロセスとは反転したプロセスが用いられたという。

ルーズなところに良さを持つ建築に精度が良いデジタルの貢献は少ない。揺れ動く時間軸的やデジタル・設計・施工・解体など自由度のレンジの異なるもの、すなわち揺れ動くものに対してパラメータをどう設けるのか、そこがシームレスにつながることでフィードバックループの可能性があるのではないか、といった議論が展開された。

複数のトピックのなかメインとなったのは「デジタルという他者がプロセスに入ってくるなかで首尾一貫して設計を進めることへの疑問」であった。

技術は自律的に価値を生むものではなく、設計者が志向する目標や問題設定によって初めて意味を帯びる。故に、技術導入は何を実現したいのかという意図の明示性が不可欠ではないか。また、デジタルは世界を別

のフィルターで高解像度に見ることができる。例えば、温熱環境シミュレーションは、世界を別の高解像度フィルターで知ることができる。それはある種の分析ツールとして機能し、今、起きている事態を正しく把握することで、より良いものを作るプロセスに繋がっていく。他者と共有できるためのブリッジにデジタルの可能性があり、といった意見が挙がった。

最後に、「建築家の専門性はどこへいくのか」。デジタルの発展・導入は、職能としての設計者や施工の役割を消失させる可能性を持っている。しかし、AIにない身体性を持つ人間は、フィジカルにおいて優位であり、総合知でAIと一線を画す。AIとともに、マニファクチャリングに技術が入ってきたことによる思考の外部化が発展につながるとされる中、建築とテクノロジーの間で建築家に何ができるのか問いただす必要があると、当日の議論はまとめられた。

3. まとめ

この状況は、芸術史における技術と表現の関係を想起させる。写真が登場したとき、絵画は写実という根拠を突然失い、その存立基盤を揺さぶられた。印象派やコンセプチュアルアートの登場は、しばしば進化として語られるが、同時にそれは、絵画が一度“死”を経験した結果でもあった。表現の役割が技術に奪われたとき、絵画は自らの存在理由を問い直さざるを得なかった。いま建築が直面しているデジタル化やAIによる判断の自動化も、同質の圧力を孕んでいる。形の生成、最適化、データに基づく意思決定これらが機械に委ねられつつある中で、建築がどこまで必然性を保持できるのか、建築とは何か、避けて通れない問いである。

S10 気候変動や社会変容を見据えた持続可能な社会基盤の未来像

～建築・ランドスケープの新たな関係性を探る～

開催日時：2025 年 11 月 8 日（土） 10:00 ～ 11:30

会 場：千葉県文化会館・大ホール

登壇者：長谷川浩己 ランドスケープアーキテクト／

オンサイト計画設計事務所／武蔵野美術大学特任教授

西田 司 建築家／オンデザイン／東京理科大学准教授

津川恵理 建築家／ALTEMY

永積紀子 サステナビリティコンサルタント／ヴォンエルフ

平賀達也 ランドスケープアーキテクト／ランドスケープ・プラス

REPORTER



石井 美沙

（千葉工業大学大学院 修士1年）



5人の登壇者。左から順に平賀さん・長谷川さん・津川さん・永積さん・西田さん。持続可能な社会基盤のあり方について、幅広い議論がなされた。



それぞれの自身の作品や活動とともに現代社会の未来像についての考えを語る。

上段左：長谷川さん・上段右：西田さん・
中段左：津川さん・中段右：永積さん・
下段左：平賀さん

1. 企画の意図

気候変動や社会変容による国内外のさまざまな課題が顕在化する現代社会において、私たち設計者に求められるのは、地球環境というグローバルな視点をもって、地域社会が抱えるローカルな課題を解決する姿勢だといえる。グローバルな目標の1つであるSDGsでは、「経済・社会・環境」の3要素のバランスを取ることが、持続可能な社会を実現する鍵だとしている。これに日本のランドスケープアーキテクトが座右の銘として掲げる「景観10年・風景100年・風土1000年」というローカルな指標を掛け合わせると、経済に資する景観形成に10年、社会の基盤となる風景創成に100年、環境の根幹を成す風土醸成に1000年という時間軸が見えてくる。本企画では、多様な領域と新たな関係性を築きながら、持続可能な社会基盤の未来像が考えられた。

2. トークセッションの概要

気候変動や社会構造の変化が加速し、人間の生活基盤が大きく揺らぎ始めている現代において、「持続可能性」はもはや特定分野だけのテーマではなくなった。

環境・経済・社会を同時に扱う必要性は誰もが理解している一方、その議論が抽象的な理念に留まりがちで、実際の「身体」や「暮らし」、あるいは「外力（自然・動物・地球のプロセス）」との関係から語られる機会は多くない。本セッションでは、持続可能性を“関係性のチューニング”として再解釈し、未来の生活基盤をどう再構築するかを語った。

長谷川浩己さんは、ランドスケープを「外からの力に素直であることがデザインの核」として語った。長谷川さんにとって“外力”とは、風や重力、地震のような自然力だけではなく、生態系の動きや、地球における水や大気の循環、さらには社会が生み出す規範や構造も含んだ多層的な概念である。盛岡の動物公園の話は、その考え方を端的に示す。園内は年数回、熊が出没するほど自然が濃い。そこで、地元の動物と世界の動物に分ける二つのループを設定し、それぞれの環境をオーバーラップして見られる空間を構成した。外力が複数のレイヤーとして重なり、そこに人間の活動を配置する。その順序が重要だという。長谷川さんにとってデザインとは、地球規模から身体レベルまでの流れを整流させて、そこに場所をそっと浮かべる行為である。建築もランドスケープも綺麗に積み重なったレイヤーの上に立つ心地よさをもっと深く感じるべきだと語る。チューニングとは、個人の身体がその外力にフィットするよう、関係を調整していく繊細な営みである。

津川恵理さんは、持続可能性の議論に「身体」を正面から持ち込んだ点で非常に印象的だった。便利で快適な生活に慣れ、非合理を許容できなくなった現代人の身体が、そもそもサステナブルであるのかという根本的な問いを投げかけた。デジタルが入力と出力を明確

に定義する世界をつくった一方、人間の身体は連続的で曖昧で、ぬるっと揺らぐような情報を発している。環境や都市がその身体性を奪ってしまえば、持続可能性をどれだけ制度的に整えても、最終的にその恩恵を受け取る「主体」が崩れてしまう。具体的な例として挙げられたのが、都市を読み替えるスケートボーダーや BMX ライダーなどのクリエイティブユーザーの存在だ。彼らは都市空間を固定的なプログラムとしてではなく、身体を媒介に多様に解釈し直し、連続的に関係を更新していく。この身体と都市の相互作用こそが、津川さんの考える「持続可能な身体」を育てる環境であり、そこで人間が鍛えられることで初めて、持続可能性が生活の中に根づくという。津川さんにとって、建築は身体の高複雑性を炙り出すための装置であり、都市はその変化を受け止める有機体である。

永積紀子さんは、「都市生活そのものがサステナブルなのか」という大胆な疑問を提示した。環境性能評価の仕組みや都市での省エネ設計が整っても、都市が地方から大量の資源を吸い上げる構造が続く限り、持続可能性は見かけ倒しになりかねないという。重要だと語ったのは、「相手の立場から見る」という身体的な発想だ。都市に住む人間が地方の暮らしのリズムや距離感を理解し、都市と地方が対等に循環しあうような構造をつくる必要がある。空き家・高齢化・過疎化が進む未来において、顔が見える範囲で人と出会える環境、木陰や風通しの良い街路の存在が、暮らしの質を左右すると語る。議論の中では、都市と地方を分野横断で横串に刺す視点の重要性が繰り返し強調された。持続可能性はテクノロジーの問題ではなく、人と人の距離感の問題でもある。

西田司さんは、動物園と庭師という二つの視点から、「発明するより発見する価値」について語った。西田さんは動物園の設計において、動物の環世界を理解することから始めるという。動物がどんな世界を見て、どう感じ、どこを安心できる場所と捉えているか。いかに彼らが観ている環世界を空間にするか。それを深掘りしていくことで、人間中心ではない空間の設計が生まれる。また、西田さんが憧れる庭師の存在は、手入れという継続的な実践の価値を示している。庭師は1年間という季節の変化を時間的なライフサイクルで楽しむ感覚がある。庭は手入れに応答して変化し、手入れは庭に対する気づきを呼び起こす。その相互関係は建築にも引き継がれるべきで、建築を時間の中で更新し続ける営みとして捉え直す必要がある。西田さんにとって発明とはゼロからつくることではなく、環境に潜んでいる価値を発見し、引き出し、適切な関係の中に置き直すことに近い。これは、庭師が季節の「旬」を味わいながら庭を調律する姿と重なる。

クロストークでは、レイヤー分けされた外力をいかに建築に取り入れるか、外側から建築をつくる必要性、そしてデジタルよりも身体から生まれるばらばらで複雑な情報が生む世界について議論が行われた。また、



今回のセッションでキーワードとなった、関係性のチューニングについて語る。

そこからランドスケープについて考えることにより土とつながり、風を受けるといった感覚こそが、自分たちの設計対象であることに気づかされた。

本セッションでは、持続可能性について多くの対話がなされたが、そこでキーワードとなったのは「関係性のチューニング」である。人・自然・時間の関係を調律しながら共に変化していくという姿勢は、個人個人が取るべきであり、持続可能性とは制度や技術で完結するものではなく、身体・外力・時間・場所が連続的に関係し合いながら更新されていくプロセスそのものである。持続可能性、身体と暮らしから再構築することは、今後、我々に必要なことなのではないか。そこにこそ、風土 1000 年を未来へつなぐための根本的な態度がある。

4. まとめ

今回のセッションを通して特に印象的だったのは、「外力をいかに建築に取り入れるか」という視点である。デジタル技術によって建築を制御・最適化することが可能になった一方で、人間の身体感覚や自然環境から受け取る複雑で曖昧な情報こそが、空間の質を豊かにしているという指摘は、設計に向き合う姿勢そのものを問い直すものだと感じた。数値化しきれない感覚や経験をどのように設計に落とし込むのかという課題は、今後の建築においてますます重要になると思う。

場所は単なる条件ではなく、人の行為や記憶、環境の変化が折り重なった存在であり、簡単に解釈しきれるものではない。だからこそ、設計者は一方的に答えを与えるのではなく、その場所に耳を澄ませ、関係性を読み取りながら建築を立ち上げていく必要があるのだと感じた。

このセッションを通じて、建築における「場所」とは、与えられた前提ではなく、試行錯誤の中で立ち現れてくるものだと実感した。人間が最も解くのが難しいのは場所であり、その複雑さに向き合い続ける姿勢こそが、建築を考える上での出発点なのだと感じた。

S11 事前防災への取組と今後の展望

開催日時：2025 年 11 月 8 日（金） 14:15 ～ 15:45

会 場：千葉県文化会館・中練習室

登壇者：相楽俊洋 千葉市総合政策局危機管理監
田村裕美 災害復興まちづくり支援機構、技術士
真壁さおり 社会福祉士
森岡茂夫 建築家／熊野くらし工房
水野敦 建築家／水野建築研究所／JIA 災害対策会議議長

REPORTER



平田雅也
(千葉大学大学院 修士1年)



当日の会場の様子。

1. 企画の意図

本トークセッションは、2024 年能登半島地震がもたらした広範囲かつ複雑な被害と、それに対する初期対応で顕在化した課題を深く掘り下げ、今後の防災・減災活動に活かすための具体的な指針を得ることを主たる目的として企画された。

能登半島地震は、液状化、土砂災害、大規模火災、そして津波が同時に発生する複合災害となり、特に半島という地理的制約から、主要道路の寸断による支援のボトルネック化と孤立集落の発生という深刻な問題が浮き彫りになった。この発災直後、建築の専門家による応急危険度判定士の派遣や、被災地への物資輸送といった初動対応において、行政の縦割りや組織間の調整不足から大きな遅れが生じた。例えば、他県では発災後すぐに民間支援が開始されたのに対し、被災地側では行政手続きや情報共有の不備により、支援の受け入れに時間を要する状況が発生した。また、家屋の損壊という物理的な問題だけでなく、被災者の生活基盤の喪失、多重債務、コミュニティの崩壊といった複合的な課題が山積み、従来の建築や土木の専門家のみによる支援では、被災者の真の「自立再建」を成し遂げることが困難であることが示された。

こうした複合的な課題を解決するためには、「災害は必ず起こる」という前提のもと、発災前の「フェーズ0」の段階で、いかに実効性のある備えを地域社会全体で確立できるかが不可欠である。

本企画の最大の意図は、災害対応の最前線で活動する建築家や技術士、被災者の生活と福祉を支える社会福祉士、そして地域防災を担う自治体職員という多様な専門家を招聘し、平時の多職種連携のあり方、市民意識の向上策、そして行政の機能強化について、具体的なアクションにつながる議論を行うことで、能登の教訓を未来につなぐ点にある。専門職としての職能を最大限に発揮し、いかに地域社会全体で連携協働の体制を構築できるかがテーマとなった。

2. トークセッションの概要

登壇者はまず、能登半島地震の被害を共有し、過去の大震災の教訓にも関わらず、応急危険度判定士の派遣の遅れや、避難所環境の劣悪さなど、依然として解決されていない問題が残っていることを確認した。特に、建築の専門家による応急危険度判定士の派遣においては、事前に防災協定を結んでいた隣県が発災後すぐに民間支援を開始できたのに対し、協定や情報共有が不十分であった地域では、民間支援の受け入れに時間を要し、初動体制に決定的な差が生じたという事実が報告された。また、避難所ではいまだに体育館での雑魚寝が解消されておらず、劣悪な環境が継続している実態から、自宅の安全確保と備蓄を進める分散避難の必要性が強く訴えられた。

こうした課題に対し、トークセッションでは、和歌山県や千葉市における具体的な事前防災の取り組みが紹介された。和歌山県では、南海トラフ地震を見据え、災害対応を「木造仮設住宅の実現」「耐震シェルター



能登半島地震の被害について活発に議論された。

及び感震ブレーカー設置補助制度の創設」「高齢者も避難しやすい津波からの逃げ地図の作成」「全自治体との防災協定締結」の五つの目標に集約し、地域独自の課題解決に注力してきた。中でも、高齢化率の高い地域において、高額な耐震改修が困難な世帯に対し、比較的安価な耐震シェルターへの補助を行うことで、命を守るための最低限の備えを後押しした点は、実情に即した施策として高く評価された。さらに、津波避難が必要な地域では、高齢者が安全に歩ける速度を基準とした逃げ地図を作成し、自治体へ提供することで、地域住民の避難行動の具体化を促した。

一方、千葉市からは行政が抱える課題を率直に示しつつ、市民の自助と共助を促す施策が紹介された。市では令和元年台風での大規模停電の経験から、長期停電への備えや情報途絶対策の強化が急務とされた。特に、災害時に最も生活を脅かす問題の一つであるトイレ対策として、市民に対し携帯トイレの備蓄を強く推奨しており、日々の暮らしの中で可能な「自助」の重要性を訴求している。また、行政職員自身が地域活動へ積極的に参加し、地域との顔の見える関係を築く努力が、災害時の円滑な共助につながるという認識が共有され、防災を一部署の業務ではなく、全職員の「リテラシー」として捉える必要性が強調された。

総括として、災害対応における最大の壁は、建築や福祉、行政など、異なる専門分野が連携する際の目標意識のズレや価値観の対立にあることが改めて指摘された。真の支援活動は、表面的な協力ではなく、被災者の「自立再建」とは何かという本質的な価値観について、建築士、弁護士、福祉の専門家など、異なる職能が平時から深く議論し、共通理解を構築することが必須であるという結論に至った。

3. 当日の質疑応答のまとめ

トークセッション後の質疑応答では多職種連携の現実的な困難さと、それを乗り越えるための具体的なアプローチに焦点が当たった。

専門職間の温度差については、技術士の分野では防災に関する分科会が常に高い関心を集め、技術力を活かした支援を「職能の使命」と捉える意識が強い一方で、



会場で配布された携帯トイレ。

社会福祉士などの分野では平時の業務の制約から災害時でも職場を離れて自由に支援活動を行うことが難しい実態が示された。福祉分野の災害派遣チームなどの仕組みは存在するが、登録者や派遣できる人材は圧倒的に不足しており、多職種連携を図るうえでの人的リソースの不足は依然として深刻な課題として認識された。

次に、多職種連携を実効性のあるものにするための具体的な方法論として、表面的な協定だけでなく、異なる職能間で価値観の衝突が起こる可能性を認識し、それを平時に解消しておくことが不可欠であると結論づけられた。例えば、災害現場で「自立再建」について議論する際、建築士が考える「丈夫な家屋の再建」と、福祉士が考える「生活基盤の再構築」というゴールが異なるがゆえに、意見の衝突が発生することがある。これを防ぐためには、平時にこそ、それぞれの専門家が持つ知見を出し合い、「被災者にとって最適な復興とは何か」という本質的な問いについて、時間をかけて共通の言語や理解を構築する努力が求められる。これは非常に時間のかかるプロセスであるが、災害発生時に混乱を最小限に抑えるための本質的な事前投資であると言える。

行政職員の防災意識の向上については、防災を特定の部署だけの業務にせず、全職員の「リテラシー」として位置づけ、縦割りの壁を越える必要があると訴えられた。多くの部署が多忙を極める中で、職員が積極的に地域活動に参加することは難しい実情があるが、その困難さを補うためにも、行政は地域との接点を持つ場として、外部の専門家や、学校の生徒たちを防災訓練や避難所運営に積極的に巻き込むことで、地域防災の新たな担い手を育成していく必要性が強調された。

こうした事前防災の取り組み全体を通じて、災害への備えは単に物資を備蓄するだけでなく、「日常と非日常の境目をいかに小さくするか」という発想への転換が重要であるという意見が出た。日々の暮らしの中で、人とのつながりや関係性を強化していくことが、結果として災害時の最大の備えとなり、この人的ネットワークこそが、迅速かつ円滑な支援活動の土台となることが改めて確認され、セッションの議論は終了した。

S12 JIA 全国 10 支部合同企画「注目の若手建築家による建築討論」

開催日時：2025 年 11 月 7 日（金） 10:30 ～ 12:00

会 場：千葉県文化会館・小ホール

登壇者：福田幸子 建築家 / アトリエフク（北海道支部推薦）

葛島隆之 建築家 / 葛島隆之建築設計事務所（東海支部推薦）

奥野八十八 建築家 / アトリエ・プリコラージュ（近畿支部推薦）

矢野寿洋 建築家 / 矢野青山建築設計事務所（四国支部推薦）

平野公平 建築家 / 平野公平建築設計事務所（九州支部推薦）

高橋岳志 建築家 / 日本大学 / gif（東北支部推薦）

斎藤信吾 建築家 / 斎藤信吾建築設計事務所（関東甲信越支部推薦）

田中宏幸 建築家 / nuca architects（北陸支部推薦）

キノシタヒロシ 建築家 / キノシタヒロシ建築設計事務所（中国支部推薦）

石川 保 建築家 / かみもり設計（沖縄支部推薦）

浅井裕雄 建築家 / 裕建築計画代表

REPORTER



細矢晶大
（千葉大学大学院 修士 2 年）



当日の会場。大会初日の最初のセッションであったが多くの人が参加していた。



テーマの発表。このテーマに沿って、若手建築家達が発表・討論を行った。

1. 企画の意図

本企画は、JIA 建築家大会では初の試みとなる全国 10 支部合同による討論会であり、今回の千葉大会で 3 回目の開催を迎えた。登壇者には、各地域で活躍する若手建築家が名を連ねた。今年は、文化会館でのセッションに先立ち、10 月に 2 日間にわたるオンラインイベントが開催され、その後、文化会館において全国の登壇者が一堂に会し、討論が行われた。この試みは、若手建築家を紹介する場にとどまらず、地域や立場を超えた建築家同士が本音で語り合い、共鳴し合う「対話の場」をつくることを目的としている。

2. トークセッションの概要

セッション前半は、それぞれがどのような思想や理念に基づいて建築を創造しているのか、自身の宣言に加え、その手段や手法について発表が行われた。

福田幸子氏は、「風景をつくろう」としていると述べた。拠点を札幌から函館へ移したことで設計手法が変化したとし、札幌時代の「内部に風景を作る」志向から、「函館の歴史的景観の継承」へ転換。古い建物の要素に新技術を融合させ、街の一部となる建築を追求していると語った。

高橋岳志氏は、周辺環境への呼応や「空間の重なり」を意識していると述べた。設計に加え、産学官が共同する公共建築やその研究、プロポーザル運営に従事。地域社会に寄り添い、風景を紡ぐ建築を目指していると語った。

斎藤信吾氏は、「多様性は多様性のままに」を掲げ、個々

の居場所を設計していると述べた。リーマンショック後の厳しい時代にトイレ設計から歩みを始め、全ての人々を等しく包容する「それぞれの居場所をそのまま残すこと」を考えていると語った。

葛島隆之氏は、「案出し」と「スタディ」を明確に区分し、数多くの模型を通じて設計を深めていると述べた。建築の全体像を司る「形式」の中に、敷地や施主の要望に応じた「変数」を内包させ、それを操作することで、普遍的なアイデアと固有の回答を両立させる設計手法を追求していると語った。

田中宏幸氏は、地域に「より良い未来」を積極的に手渡す建築のあり方を追求していると述べた。福井と神戸を拠点に活動していく中、建築家の存在が希薄な地域で、都市部との橋渡し役を担い、海岸沿いの伝統的な「水仙畑」の景観を次世代へ繋ぐため、宿泊施設設計や再編計画に従事していると語った。

奥野八十八氏は、「目の前の手掛かりから遠い秩序を引き寄せる」を掲げていると述べた。山並みと屋根を繋ぐ景観形成、京町家の通り庭の再解釈による都市構造の継承、伝統工法の改修を通じた時間の積層など、土地の履歴や大きな文脈を現代の設計に重ね合わせ、建築を未来へと繋ぐことを目指していると語った。

キノシタヒロシ氏は、身近な社会と接続し、建築をリアルに捉える姿勢を重視していると述べ、生活に密着した場を通じて社会との接点を持ち続けることを活動の核に据え、その延長線上にある大きな社会を見据えつつ建築を作り続けることを志向していると語った。



熱い議論を繰り広げる若手建築家。

左から浅井氏（司会）、福田氏（北海道支部）、高橋氏（東北支部）、斎藤氏（関東甲信越支部）、葛島氏（東海支部）、田中氏（北陸支部）、奥野氏（近畿支部）、キノシタ氏（中国支部）、矢野氏（四国支部）、平野氏（九州支部）、石川氏（沖縄支部）。



矢野寿洋氏は、「考えて走る建築家」を掲げ、東京での経験を経て、地方では建築を広く届けるための「協調」と「即行性」が不可欠だと実感。現場に足を運び、多様な声を聞きながら、自らのフットワークを活かして周囲と連携し、実作を通して地域社会へ建築を浸透させることを目指していると語った。

平野公平氏は、建築の「固有性（場所・要望）」と「汎用性（工法・歴史等）」の二軸を並行して思考し、統合することを目指していると述べ、住宅等のパーソナルな設計を主軸としながら、これら二つの視点を重ね合わせることで、社会との接点を生み出す設計手法を追求していると語った。

石川保氏は、「沖縄とは何か」を主題に、建築を通じて地域の歴史や文化を深く見つめていると述べた。鍾乳洞を彷彿とさせる原空間の再構築、コンクリート外皮による環境に応じた表情の創出、樹齢百年の並木を継承する校舎設計など、素材・技術・風景を繋ぎ合わせ、気候風土に根ざした設計を通じ、沖縄のアイデンティティを次世代へ手渡す活動を追求していると語った。

セッション後半は、建築家達の宣言でも印象的で共通のキーワードとして挙げられた「風景」をテーマに活発な議論がなされた。

冒頭、斎藤氏が「教科書的な設計を柔軟に壊し、多様な居場所を作ることが、今までにない風景を生み出す」と宣言し、議論の口火を切った。これに対し、石川氏は、全国チェーンの進出によって均質化する「ジェネリックな風景」への強い危機感を表明した。こうした風景観を受け、葛島氏は「都市部ではつくられたものの集合体として風景を見出し、地方では大地や海といった不変のものに風景を見出している」と、活動拠点による捉え方の違いを鮮やかに整理した。しかし、風景は決して視覚的な情報のみに留まるものではない。高橋

氏が提唱した「人の活動や思考も風景の一部である」という視点や、北陸の田中氏が述べた「人の営みや手の痕跡を守ることこそが建築家の役目である」という言葉は、建築をより時間的、かつ人間的な存在として再定義させたように感じた。

また矢野氏は「風景はRAW（ロー）画像のようなもの」と述べ、あらゆる情報が圧縮・加工されて届く現代において、生身の空間でしか体験できない「非圧縮なりアリティ」にこそ価値があるという指摘は、建築の原点に立ち返るような強烈な印象を受けた。

議論の後半、焦点は風景の「更新とスピード」へと移った。奥野氏は街の変化を前提としながらも「映画のセットのように残しても意味がない。大切なのは記憶を引き継ぐことだ」と断じた。伝統的な壁面線の記憶といった本質的なエッセンスを引き継ぐことで、現代の生活と共存する街のあり方を追求する姿勢はとても印象的だった。最後に田中氏が語った「都市は電車のスピード、地方はトンビのスピード」という対比は速すぎる時間の流れの中で、我々が何を取りこぼしているのか、その「取りこぼされたもの」を意識的に掴み取り、形にするのが建築家の使命なのだ、という結論は、会場全体をより風景に関心を向けさせ、セッションは幕を閉じた。

3. まとめ

私が今回、学生レポーターとして感じたことは、「風景」の捉え方が各地域の建築家によって大きく異なることだった。地域での「風景」に建築という視点から常に向き合っているからこそ生まれてくる考え方が議論の中で次々と発言されていたのは、今改めてレポートを書いていく中でとても貴重な体験であったと感じた。

S13 第19回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展「In-Between」から考える：建築をたがやし情報を育てる実践

開催日時：2025年11月7日（金） 16:00～17:30

会場：千葉県文化会館・小ホール

登壇者：伊藤亜紗 美学者／東京科学大学教授
木内俊克 建築家／SUNAKI Inc.／京都工芸繊維大学特任准教授
砂山太一 アーティスト、プログラマー／SUNAKI Inc.／京都市立芸術大学准教授
渡辺 育 インディペンデントキュレーター／建築家

REPORTER



坂内俊太
(千葉工業大学大学院 修士2年)



本セッションの主題「MITIGATION（緩和）から ADAPTATION（適応）へ」。

1. 企画の意図

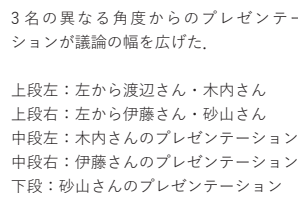
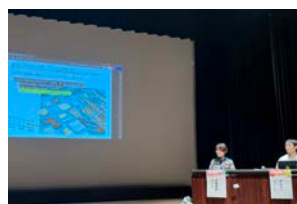
本セッションは第19回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展を背景に、環境危機や社会的な危機への対応を「緩和（mitigation）」から「適応（adaptation）」へ転換するという主題を深掘りするものであった。これは現代の危機に対し、それを緩和しようするだけでは、対応として十分ではないということを示している。いかに問題に適応し、どう対応するのかというフェーズを考えることが求められた。

2. トークセッションの概要

セッションは冒頭、木内俊克さん、伊藤亜紗さん、砂山太一さんの三者が各々プレゼンテーションを行い、その後のパネルディスカッションは渡辺育さんがファシリテーターとして議論を深め、質問を求める形で進められた。

木内さんは近現代建築の形成過程での「緩和を前提とした制御的アプローチ」の系譜と「適応的アプローチ」の系譜を対比した。制御の系譜としては、1930年代にインターナショナルスタイルが台頭し、50年代に発表されたバックミンスター・フラーのマンハッタン・ドーム計画などが環境を対象として制御しようとした極点といえる。一方、適応の系譜としては、1964年MoMAでのルドフスキーの「建築家なしの建築展」から、70年代のアレクサンダーのパターンランゲージに連なり、環境への適応的な視点の結晶化がなされた。

この適応的なアプローチの重要性を、ピエンナーレの金獅子賞受賞作などを例に示した。バーレーン館は伝統建築から着想を得て、特別なシステムを使わず受動



3名の異なる角度からのプレゼンテーションが議論の幅を広げた。

上段左：左から渡辺さん・木内さん
上段右：左から伊藤さん・砂山さん
中段左：木内さんのプレゼンテーション
中段右：伊藤さんのプレゼンテーション
下段：砂山さんのプレゼンテーション

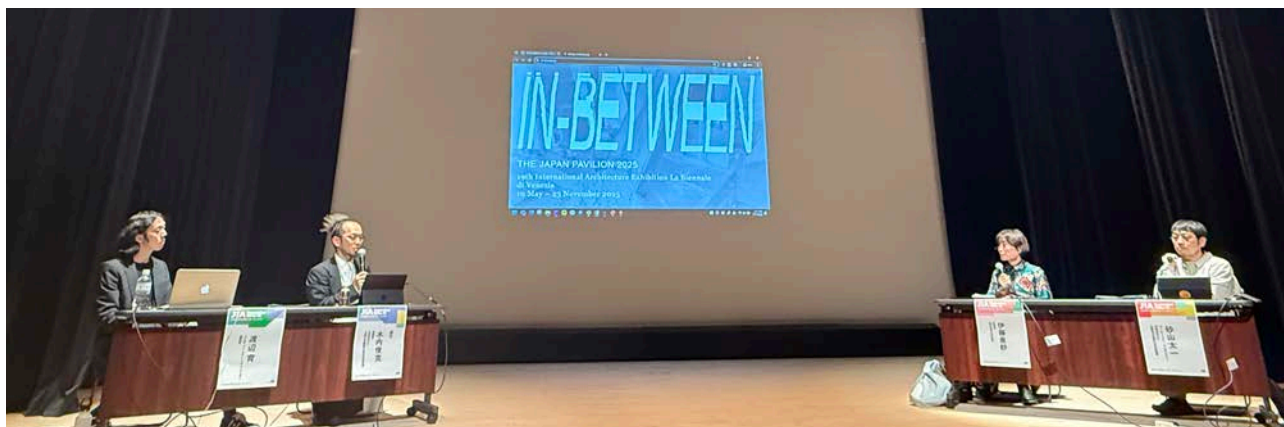
的な通風で気温上昇を抑える空間を提示し、「カナルカフェ」は機械と生物のろ過のハイブリットによってラグーンの水からエスプレッソを提供するなど、伝統的な知見や自然と最新技術の融合が評価されているとした。

同時に、これらが1960～70年代にすでに到達していた概念とするならば、この「適応的アプローチ」をいかに一歩前に進められるかを考えたいと話した。

木内さんは、「適応とは『単一の』資産から脱却すること」であるとした。人が伐採した森に生育する松茸のように、制約の中から新しい価値が生まれる事例を示し、「問題」を解決する対象と捉えるのではなく、人・生物・資源による生成関係の場として捉えることが「適応」を一歩前に進めるのではないかと投げかけた。

また、木内さんが関わった日本館展示での、展示と実際の動線とのズレや光のズレから生じる「誤読や欠落」の思考の提示は、単なる機能的制御を超えた、生成関係へのヒントとして本セッションのキーとなった。

伊藤さんは「終わらないチェス」と題し、利他の思想からプレゼンテーションを展開した。他者との間の問題で「解決」を目指すことは危険であり、いかに「交渉を継続」するかが重要であるとした。ここには木内



後半のディスカッション。四者とも熱のこもった議論を展開した。

さんと共通する考えが見えた。ものを使って交渉することの具体的な事例として、ベトナムの例が挙げられた。ドイモイ政策以降、激化した私有化の争いの中で、人々は家の前の植木鉢を増やしてくことで占有地の拡張を行っている。植木鉢という「主張しつつも、言われたら動かせる」もので交渉することで、インプレーのような状態が続き、法律的解決からは生まれない、時間的な私有地の変動の面白さが示された。また、「タイガーケージ」のような建物からはみ出す即席の部屋の拡張も、同様の交渉の形を示した。

さらに、四国の水問題を扱った「山のフタを開ける」プロジェクトでは、様々な属性の人々に100円ショップで買えるもので「山」を表現してもらい、「具体的抽象の生成」を試みた。この試みによって、山との関わり方が異なる人々の表現に「ズレ」が生じることが可視化され、そのズレを認識することによって山がインプレーの状態になり、複雑な利害関係への関わり足の足かりを築こうとした。この「ズレ」の思考には、SUNAKIの日本館展示でのズレによる思考の立ち上がりとの類似性が見られた。

砂山さんは、ただの石を「この石」にするプロジェクトで、環境から拾ったただの石をそのまま資源として扱うのではなく、データ化し、情報に翻訳し、様々な大きさの石にして展示することで、再び環境に戻すという循環するプロセスを提示した。これが砂山氏にとっての情報を耕し育てるということであり、「問題を解決する対象としてではなく、生成的關係の場として捉える」というセッション全体の共通認識を、デジタルと不均質な物質を媒介とした具体的な実践へと結びつけているといえる。

後半のパネルディスカッションでは、渡辺さんのファシリテーションにより、伊藤さんがSNAKIの取り組みやビエンナーレについて感じたこと、SNAKIの二人が伊藤さんのプレゼンテーションについて感じたことについて意見交換された。

そこから議論はAIと建築実務の関連に及んだ。AIの危険性に対する指摘がある中で、その危険性を回避し、設計の複雑な側面にAIを応用していくための手段として、「自己修復制」が提示された。これは、AIが自

らチェックし、別の方法に切り替えられる機能を持っているのであれば、積極的に活用していくべきだという見解である。木内さんは、「今回のプレゼンテーションではズレていくことこそが大事だと聞こえるかもしれないが、そうとも言いきれないのが設計の面白い部分であり、重要な部分である」と話した。また、「AIを使うことがもはや前提となり、そうして一つの方向にものごとが効率化していったときに、その価値観に乘らない判断や、材料・環境をどう常に見ていきながら、関わり合っていくか。いかに煮え切らない部分を持ったままでいれるかという視点が重要である」と続けた。

最後に伊藤さんから内蔵付きAIの話題が提示された。普通、人工物には人間側が規定した入力方法以外には反応が起こらないように設計されているが、AIなどの人工物の身体にも人間のようにあらゆる入力を認めてみよう、というのが内蔵付きAIの研究である。例として、ファミコンを外から熱した時にゲーム内でバグが発生するという話題を引き合いに、規定された入力方法以外でAIや人工物に入力を行うことで、計算されていた結果を超えたような物理的状态、結果が得られるといった内容であった。これもまた「ズレ」を生かした新たな関係性を示唆するものといえる。

本セッションは、現代の様々な危機に対して「制御」や「解決」ではなく、「適応の生成」や「交渉の継続」を志向し、単一の最適解を求める思考から脱却し、多様な関係の中から新たな可能性を見出すという、現代建築における重要な方向性を示した。

3. まとめ

環境危機に対し「制御・緩和」ではなく、「適応・交渉」を軸に据える視点が非常に印象的であった。砂山さんの「情報物質性」や伊藤さんの「利他的な間接性」という概念は、建築を解決の道具ではなく、変化を許容し続ける「場」へと再定義している。単一の正解を求めず、ズレや物質の個性を尊重する姿勢に現代建築の希望を感じた。最後の伊藤さんからの内蔵付きAIの話題は今後の展開が非常に気になるものであり、現代建築に通じる可能性を感じさせた。

S14 社会に発信する建築家のメディア実践を考える

建築家／アイダアトリエ

(千葉大学大学院 博士2年)



上段：小山 空間をめぐりながら解説をする（左） 猪名川霊園でドローン撮影（右）
中段：澤 トイレプロジェクト（左）ワークショップ（中）モミブロックガレージ（右）
下段：会田 2020 年度 Bulletin 表紙

JIA では一般の人達に対して建築をどう伝えていくかをテーマに、時代に合わせた広報活動を実施している。2年半前に公式 Instagram を立ち上げ、現在、ようやく 5,000 フォロワー手前まできた。このような流れがある中で、様々なメディアを駆使した建築家の発信の仕方を考えていくことが本企画の意図である。

冒頭、本セッションの司会進行を務める建築家の会田友朗さんより、企画意図の説明が行われた。電波状況が悪い部屋を「秘密の小部屋」と呼び、リラックスした状況を演出しながらスタートしていった。40人ほどの参加者の大半は建築設計の実務をしている人達であった。ここでは建築家である小山光さん、澤秀俊さん、映像メディアの専門家である和田信太郎さん、建築系メディアのエディター服部真吏さんをパネラーに、この多様性の時代、今後の建築家の発信の仕方について考えていった。

小山光さんは、大学を出てからイギリスで設計活動後、日本で事務所設立。最近は、マンションや商業ビルな

澤秀俊さんは、大学を出てからドイツに留学したりして8年前から出身地である飛騨高山で建築事務所を開設している。「地域資源を用いて建築をつくる喜びを発信する」をテーマに主要メディアが集う大都市から遠い地方において、地方から元気になる日本を目指し、建築の実践とメディア発信をしていきたいと語った。レゲエ音楽を愛するユニークな人でもある。

里山に転がってる資源をいかに建築や空間に反映できるか、どうやって活用できるか、このようなことをずっと模索している。これも広義な意味で環境デザイン、建築の設計の一環だと思っているそうである。仲間たちと農業や山でワイワイやって楽しそうにしてる様子



登壇者の集合写真 左から、会田さん、和田さん、小山さん、服部さん、澤さん、皆さん話題も豊富で、とてもユニークな人達である。

を撮りため、積極的に SNS で発信し、徐々に見てくれる仲間が増えれば良いと将来像を語った点が印象的であった。

服部真吏さんは、大学で美術史を勉強した後、建築雑誌社で 5 年ほど働いて独立。オンラインとオフライン両方で仕事をしており、海外の建築家を紹介をしたり、地方に取材に行き、レビューを書いたり、取材記事を書いたりしている。様々な場所で、いろいろな情報を繋いでいくようなことを企画から運営までやっている。メディアの話をするのに、インターネット、SNS の話だけではなく、紙メディアで働いていた専門の知識もあるので幅広い見方ができる人である。

メディアは何をするのか、建築家ではない人はどう関わっていくのか、「時代を映す建築表現を目指して」いつも考えているようだ。見てたまったストック映像で、他に同じような関心を持って表現している人に事例紹介したり、地方の人に活動紹介したり、何か見ることの蓄積を続けていきたいと抱負を語った。

和田信太郎さんは、今回の公式ガイドブックのディレクションも担当した人である。建築以外のコンテンツラリーアート分野の人で、その中でも映像とかメディアが専門である。アーティストたちと共同しながらプロジェクトベースで何か具体的に取り組んでいくことを仕事としている。地域とか地方とか、ローカリティが強いところこそ、今メディアで何かが出来るのではないかと地方自治体等と一緒に取り組んでいた。メディア実践から立ち上がる公共性についても考えている。建築家はモノベースでの情報発信をしなくてはいけないと思ってる人が多いが、行為とか、アクティビティみたいなものを発信するのはとても重要であると投げかけた。

今回登壇した 5 名は、国内外で建築分野に取り組んでいるが、共通点として、自ら仕掛け、独自の表現方法

で様々なメディアを使い、情報発信している姿がとても魅力的であった。

後半は、今後の建築家のメディア発信について、ディスカッションが行われた。ここでの論点は主に、新しいチャレンジを楽しみながら様々なメディアで発信しているところである。Instagram はスマートフォンなどで個人で見るものだが、みんなで見るのも、すごく面白い上映会になるのではと言う発言があり、興味があるものを撮る、また喜びのシーンを発信していくことは、すごく大事な気がし、コミュニティとかファン層が集めやすく感じられるとみんなが同感していた。

建築家が建築を残す時に、意思決定に至る経緯を、映像によって明確に捉えることが多い。映像は建築家の意思とか、建築が何を残してるのかを知ることができる。建築家でしか撮れない映像。建築家ならではのメディア発信の方法があることを改めて実感した。

3. 当日の質疑応答

最後に会場の声として、九州から参加した JIA 建築家 PR 動画推進ワーキングに初期から関わってくださっている松山将勝（前九州支部長）さんから発言があった。小山さんや澤さんがどのようにビジネスに繋げて、どのくらいの利益を得ているのだろうかと思っていたようだが、そんなこと聞くのは、もうダメですねと語っていた。「まず好きになること」という言葉がすごく響いたと。映像が好きなので、これからも頑張ってみますと今後の抱負を語った。

4. まとめ

私が今回、学生レポーターとして感じたことは、登壇した 5 名は、いずれも異なる立場から建築に取り組んでいるが、それぞれの視点に基づく独自の考えを有し、各メディアの特性を的確に活かしながら、新たな情報発信に積極的に取り組む姿が印象的であった。

S15 これからの職能に向けて、建築教育はどうあるべきか

開催日時：2025 年 11 月 8 日（土） 10:00 ～ 11:30

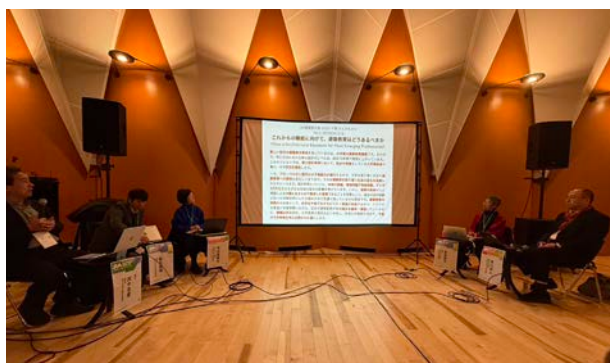
会 場：千葉県文化会館・大ホール

登壇者：岩本真明 建築家／九州大学芸術工学研究院准教授
高口洋人 環境工学研究者／早稲田大学理工学術院教授
田中友章 建築家／明治大学理工学部専任教授
寺田真理子 キュレーター、編集者／横浜国立大学院 Y-GSA 准教授、
スタジオマネージャー
吉良森子 建築家／moriko kira architect／九州大学院教授

REPORTER



飯塚 真尋
(千葉工業大学大学院 修士1年)



当日の会場。聴衆はこれからの教育について改めて考えさせられる討論であった。



5人それぞれ異なる視点からより良い教育環境への取り組みを共有した。

上段左：岩本真明さん 上段右：寺田真理子さん

下段左：吉良森子さん 下段右：高口洋人さん

1. 企画の意図

日本における修士設計のレベルは、この10年間で着実に向上している。一方で、グローバル化や国内の少子高齢化が進む中、大学を取り巻く環境や建築教育に対する期待は変化しており、設計教育も地域課題、環境問題、気候変動、デジタル技術の進展など、社会の影響を強く受けるようになってきている。しかし、建築や建築教育が内需型産業として発展してきた背景から、過去の成功体験に基づく旧態依然とした仕組みが依然として残っているのも現実である。建築教育の国際化と学生・修士生のモビリティが進む中で、日本の建築教育は国際的な競争環境の中に置かれている。その中で、日本の建築教育がこれまで培ってきた強みをいかに維持・発展させていくかが問われている。本セッションは、大学教育の現状を広く共有し、社会との接続を含めて今後の建築教育のあり方を考えるための議論の場として位置づけられた。

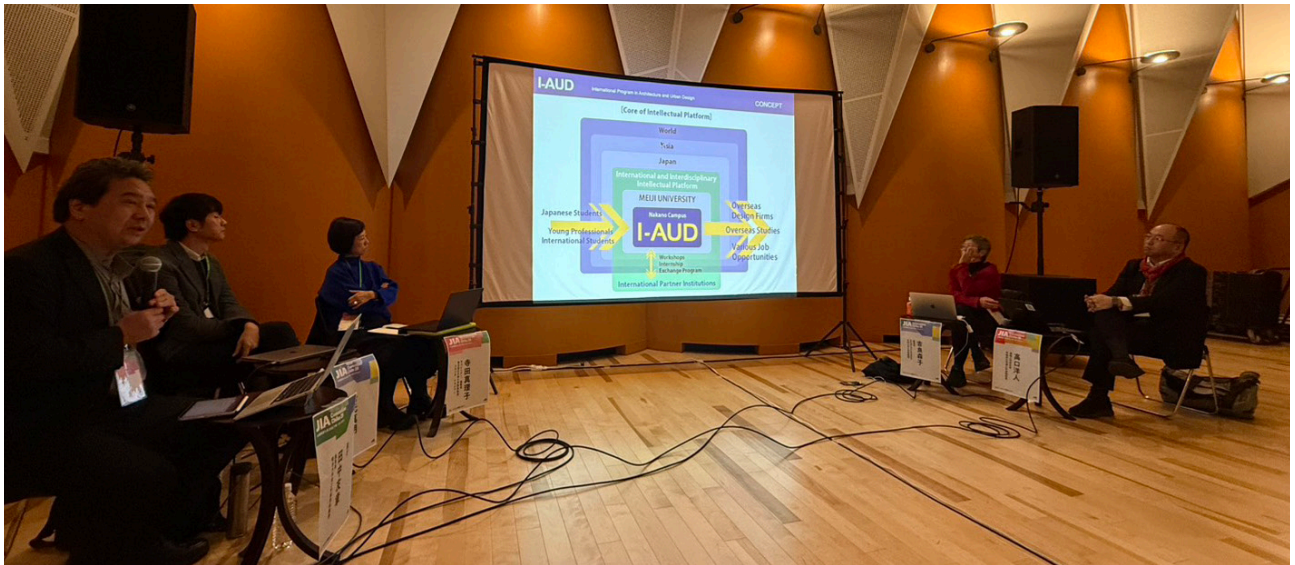
2. トークセッションの概要

現在では、大学を卒業してすぐに実務へ移行するとは限らず、大学院へ進学したり、在学中にインターンを経験したり、一度社会で働いた後に学びへ戻るなど、学びと実務を行き来する多様なキャリアが存在している。このような状況を背景に、建築を取り巻く社会や技術の変化に応答した教育環境の整備が求められている。それぞれの立場から現在進めている教育実践について報告し、その可能性や課題、国際的な広がりについて共有した。

岩本真明さんは、AIが発達し大学1年生の段階からそれを使用している現在の状況を踏まえると、社会の変化に応答するように設計教育も変わっていかねければ

ならないと述べた。一方で何を守り続けるべきなのかという点にも触れ、守るべきものとして研究室単位の教育を挙げた。これは日本独自の仕組みである。日本全体を見渡すと多様な教育がさまざまな場所で行われており、それこそが生き残り戦略であると岩本さんは考えている。そのような状況の中で研究室という教育システムを継続し、維持していくことも重要だと強調した。研究室単位の利点として小規模なプロジェクトを通じて、基本設計から現場監理まで一貫して経験できる点が挙げられる。しかし、属人的なシステムであるため学生に過度な負担がかかったり、搾取的な構造になったりする可能性がある。現代で求められるコンプライアンス意識や職能に必要な要件をどのように再整備し、教育に組み込んでいくかが重要になると述べた。

寺田真理子さんは、准教授を務めるYGSAの教育体制について紹介した。YGSAは日本特有の研究室制度ではなくスタジオ制を採用した大学院であり、学生の自主性や自治による学びを重視する点に特徴がある。学生は2年間で4つのスタジオを回り、多様な思想や建築に対する考え方を自主的に学ぶ。また、大学で学んだ学生が社会に出て建築家として実務を経験し、再び大学に戻るといった学びと実務が循環する教育のあり方を目指している。さらに、建築は個人で完結するものではなく、社会や他者との協働によって成立するものであるという認識のもと、建築の固有性を保ちながらも、都市や地域における共有性・共同性を育む教育が行われていることが示された。



セッションでは日本独自の建築教育の在り方だけでなく、国際化への取り組みなど多岐に渡った、I-AUD について話す田中友章さん。

吉良森子さんは、九州大学における BCAT の活動について紹介した。BCAT は大学内部にとどまらず、企業や自治体と連携しながら社会課題を発見し、持続可能な未来のあり方を実践的に考える取り組みである。活動内容は、牡蠣小屋で発生する殻の廃材を活用した小規模なプロジェクトからハウスメーカーと協働した環境住宅の計画に至るまで多様なスケールに及んでいる。正解のない社会の中で実践を通して考え続ける姿勢の重要性が示された。また、設計に加えて環境や構造など多分野の知見を活用できる点を日本の建築教育の強みとして挙げ、テクノロジーを前提とした訓練の必要性が語られた。

高口洋人さんは、早稲田大学における建築教育の現状と AI の影響について報告した。学部 4 年生が提出する概要書においても AI の使用が進んでいるという。現時点では約 35% の学生が AI を使用しており、その多くはテキスト生成であるが、今後はほぼ 100% に達すると予測された。比較的単純な設備や構造設計は AI によって代替可能になりつつある一方で、熟練した設計者にしか担えない領域への期待も示された。AO 入試の導入、卒業設計におけるグループ設計、工学系学生が設計課題に主体的に関われる環境づくり、また、設計案に対してエネルギーや風、照明の解析を行い設計を見直す授業も実践されている。日本ではデザインとエンジニアリングがもともと統合されている点を強みとしつつ AI に勝つ一部の人材だけでなく、多様な役割を担う設計者をどのように育てていくかが現在の大きな課題であると指摘された。

田中友章さんは、明治大学における I-AUD プログラムの取り組みについて紹介した。I-AUD は建築デザインおよび都市デザインを主軸としたスタジオ制教育を特徴とし、すべての授業を英語で行う国際的な教育プログラムである。明治大学では約 15 年前から本格的に国際化に取り組み始め、本プログラムがその中心的な役割を担っている。学生構成は留学生が 3 割を占め多

様なバックグラウンドを持つ学生が共に学ぶ環境が整えられている。在学中に留学して単位を取得したり、他国へ移動した際にも教育内容が認められたりする制度の重要性が指摘され、そのような基盤整理は日本においても不可欠であると述べられた。日本の建築資格制度は歴史的に建築基準法を基盤として発展してきたため、教育要件が非常にホリスティックな仕組みとなっている。一方で、多様な人材が同じ枠組みの中で学ぶことで将来的な協働やコラボレーションにつながる点は日本の建築教育の強みであるとされた。しかし、優れた教育内容を持つプログラムが多数存在する一方で、それらを支える制度面の整備は十分とは言えず現在の信頼性が今後も維持できるのかという課題が示された。

本セッションを通して、建築教育において多様な教育モデルが併存していること自体が、日本の建築教育の大きな強みであることが示された。大学や教育機関ごとに異なる思想や方法論が存在し、それぞれが縦に専門性を深める教育を行っている点は、日本の建築教育の特徴の一つである。一方で、その多様性を個別の取り組みにとどめるのではなく、大学や分野を越えて横断的につながっていくことの重要性も浮き彫りとなった。

4. まとめ

このセッションを通じて国際的な教育環境に目を向けると、優秀な人材が世界規模で流動しており、日本の建築教育もその競争の中に置かれていることを実感した。現在の信頼性や実績に依拠するだけではなく、教育の内容や制度を継続的に更新し続ける姿勢が求められる。多様性を内包した教育環境を維持しながら、それらを相互に接続し、社会や国際的な文脈の中で位置づけ直していくことが、これからの職能に向けた建築教育における重要な課題であると考えられる。

S16 建築学生が考える「これからの建築と社会」@ 千葉

開催日時：2025 年 11 月 7 日（金） 12:30 ～ 14:00

会 場：千葉県文化会館・中練習室

登壇者：平田雅也 千葉大学融合理工学府創成工学科建築学コース 修士 1 年
藤本千廣 千葉工業大学大学院創造工学研究科建築学専攻 修士 1 年
西村風香 東京電機大学大学院未来科学研究科建築学専攻 修士 1 年
浅倉みなみ 東京理科大学創域理工学部建築学科 4 年
三野毬絵 日本大学大学院生産工学科建築工学専攻 修士 2 年
水越英一郎 建築家／山下設計

REPORTER



千葉雄介
(千葉大学大学院 修士 1 年)



当日の会場。参加者は市民や学生なども多く見られた。

1. 企画の意図

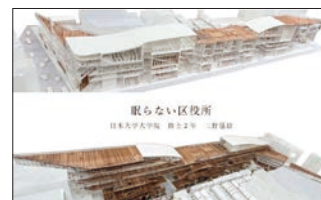
本企画では、近年の卒業設計のテーマが多様化し、いわゆる単体の建築物の設計提案に加え、地域社会の持続性向上を目的とした広域的なまちづくりの提案や、建築・土木の融合による地域課題の解決など、綿密な調査・分析に基づく、実践的かつ新鮮なアイデアへと広がりを見せている点などに着目し、千葉で建築を学ぶ建築学生を登壇者に招き、これからの建築と社会の在り方や建築家の職能などについて考えることが意図された。

2. トークセッションの概要

冒頭、本セッションの司会進行を務める水越英一郎さんより、本企画の意図の解説や、千葉の建築教育の特色である「千葉県建築学生賞」・「C リーグ」の 2 つの教育プログラムについて紹介が行われた。

続いて、平田雅也さん、三野毬絵さん、西村風香さん、浅倉みなみさん、藤本千廣さんの 5 名が自身の作品をベースにこれからの建築と社会の在り方についてプレゼンテーションを行った。

平田さんは、栃木県益子町を舞台に、地場産業の衰退という課題を地域要素の再編によって解決することを意図した「繋ぐ建築」を提案した。また、討論では、これからの社会を「全員が建築家の時代」とであると定義した。専門家だけでなく、住民も場所の使い方や維持に主体的な責任を共有すべきであり、設計者はあえて未完成な余地を残し、変化を受け入れる枠組みをつくるべきだと語った。



5 人の建築学生によるプレゼンテーションより、同世代でありながら、それぞれがかなり異なる視点で建築と対峙している点が興味深い。

上段左：平田さん・上段右：三野さん・中段左：西村さん・中段右：浅倉さん・下段左：藤本さんの作品。

三野さんは、新宿歌舞伎町の 24 時間稼働する特性に着目し、夜の街の人々をも包摂する眠らない区役所を提示した。そして、建築家は「土地の見えにくい課題を読み解く翻訳者」であるべきだと語った。地域の人々に受け入れられ、使い続けられる「愛される建築」こそが理想であり、利用者の潜在的なニーズを形にする視点が欠かせないと説いた。

西村さんは、商店街の空き店舗を住居や福祉機能と再編することで、商いの向こう側にある生活の豊かさを描いた。建築を完成品と捉えず、「使いながら育てる建築」という視点を提示し、市民が利用者から空間の担い手へと変化する中で、建築家はハードの設計に留まらず、地域食堂などのソフト面の設計を通じて建築の成長を支え続けるべきだと論じた。

今回の登壇者の中で唯一の学部生である浅倉さんは、自身の母校を舞台に、空間の段差や些細な仕掛けによって多様な居場所を創出する設計手法を発表した。建築を「生活の延長線上にあるもの」と捉え、空間とそこで起こるできごとが相互に応答し合う対話的なプロセスの重要性を強調した。人々の些細な振る舞いに向き合い、建築が関係性を見せるきっかけになるような空間づくりを志している。



トークセッションの様子。参加者とともに活発な議論が交わされた。

藤本さんは、都市の喧騒から精神を切り離す大きな逃げ場所としての美術館を提案した。建築の役割を、機能や造形を超えて、「利用者の感性や主体性を引き出すきっかけを与える存在」であると総括した。人と社会、人と人を緩やかに繋ぎ、新しい社会の姿を想像させる未来を描く装置としての建築の可能性を示した。

今回登壇した5名は同世代であるが、それぞれが自身の核となる考えを持ち、その考えを大切にしながら設計に取り組んでいる姿が印象的だった。

後半は、これからの建築と社会の在り方について、以下の二つの論点を中心に議論が深められた。

【これからの社会において建築に期待する役割】

ここでは、建築がもはや単なる箱ではなく、社会的な孤立を防ぎ、希薄になった地域コミュニティに「共通の像」や「関係性のきっかけ」を提示する装置としての役割が議論された。学生たちは、過密と孤立が同居する現代都市において、建築が人と人、人と社会を緩やかに繋ぎ直すプラットフォームになることへの期待を語った。

【これからの設計の進め方・建築家の役割】

建築家は「形をつくる」側から、市民の主体的な関与や成長を支える「枠組みをつくる」側へと移行すべきだという結論に至った。ソフト面のプログラム設計や、住民が自ら空間をカスタマイズできる「余白」をデザインすることなど、完成後も利用者の営みに並走し続ける新たな職能のあり方が提示された。

3. 当日の質疑応答

会場からは、理想とする開かれた建築を、既存の硬直した法規や社会システムの中でいかに実装するかという問いが寄せられた。登壇者からは、合意形成のプロセス自体をデザインすることも建築家の職能であるとの回答があった。水越氏からは、学生たちが示した丁寧なリサーチこそが、実務で社会と向き合う際の基盤になるとの激励が送られた。また、「AIやBIMのよう

なツールの活用が、住民との対話的なプロセスにどう寄与するのか」という現代的ツールが発達した今日ならではの質問もあった。これに対しては、「複雑なシミュレーションや視覚化により、専門知識を持たない住民との『共通の像』を構築する強力なツールとなる。効率化のためだけでなく、多様な主体の意志を空間に反映させるための対話のプラットフォームとして活用すべきである」との回答がなされた。

4. まとめ

本セッションを傍聴し、同じ建築学を専攻する大学院生として、我々の世代が直面しているパラダイムシフトの大きさを改めて痛感した。

かつての建築家が「強・用・美」を備えた不変の傑作を目指したのに対し、登壇した5名の学生は、建築を時間と共に変化・成長し続ける動的なプロセスとして定義している。彼らが語った「全員が建築家の時代」や「使いながら育てる建築」という言葉は、人口減少や気候変動といった正解のない課題に対する、一つの誠実な応答であると感じた。

特に印象的だったのは、デジタル建築世代でありながら、彼らの関心がアルゴリズムミクな造形美よりも、むしろ「人々の些細な振る舞い」や「目に見えない地域ネットワーク」という極めて身体的でアナログな領域に向けられている点だ。BIMやAIを使いこなす技術を持ちながら、それを対話的なプロセスを支援するために用いるという姿勢に、これからの建築家の新たな強みを見た。

建築を設計することは、単に建物という「ハード」をつくることではなく、社会の新しい関係性を構築するための「枠組み」をつくることへと変容しつつある。卒業設計や修士設計という自由な場において、彼らが示した「社会に対する批評性」と「場所への深い愛着」は、実務という荒波に出た後も、建築が単なる消費財に陥ることを防ぐ防波堤となるだろう。

S17 私にとっての「槇文彦」

開催日時：2025 年 11 月 7 日（金） 10:30 ～ 12:00

会 場：千葉県文化会館・大ホール

登壇者：富永譲 建築家／法政大学名誉教授

栗生明 建築家／千葉大学名誉教授

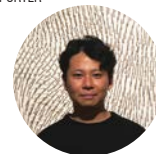
宮崎浩 建築家／プランツアソシエイツ

三谷徹 ランドスケープアーキテクト／オンサイト計画設計事務所

亀本ゲーリー 建築家／槇総合計画事務所

鈴木弘樹 建築家／千葉大学准教授（司会）

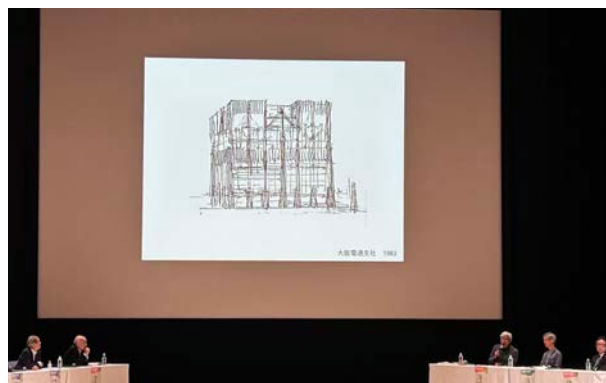
REPORTER



高澤政弘
(千葉大学大学院 修士2年)



当日の会場。各自のエピソードを通じて、様々な視点から槇氏について語られた。



当日のスライド。槇氏のスケッチと共に当時を語る宮崎氏。

1. 企画の意図

2024 年 6 月 6 日、日本を代表する建築家、槇文彦氏
が逝去された。千葉大学亥鼻キャンパスには、槇氏
の国内 2 番目の作品である「あのはな記念講堂」が耐
震改修を経て現存している。

本企画では、槇氏と親交の深かった 5 名のパネラーを
招き、『私にとっての「槇文彦」』と題し、生前のエピ
ソードやプロジェクトを交えてお話しいただき、そこ
から「槇氏が我々に残してくれたもの」について議論
が交わされた。異なる立場で槇氏とご活躍されたパネ
ラーの皆様は、独自の視点から槇氏を語り、その内容
は建築作品、建築論、人物像までと多岐に渡った。パ
ネラーの皆様が考える槇氏を通じて、参加者自身も「槇
氏が我々に残してくれたもの」について思索する貴重
な機会となるセッションとなった。

2. トークセッションの概要

冒頭、本セッションの司会進行を務める鈴木弘樹氏に
より、本企画の意図の解説や、パネラーの皆さまの経
歴や槇氏との関係について紹介が行われた。

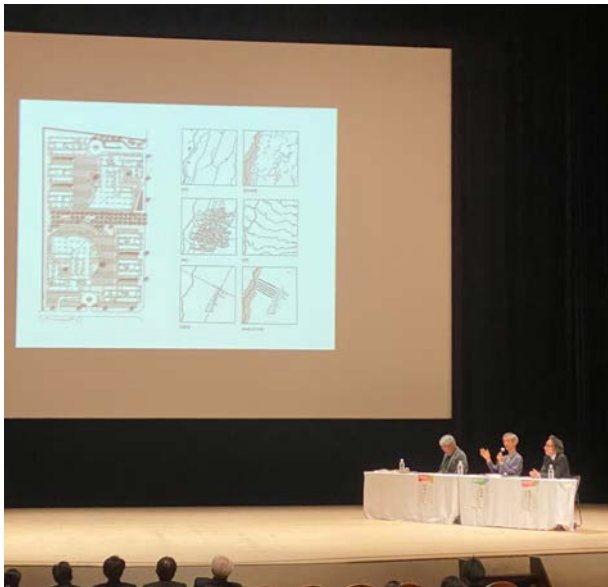
続いて、富永譲氏、栗生明氏、宮崎浩氏、三谷徹氏、
亀本ゲーリー氏の 5 名が槇氏との出会いや関係性を交
えつつ、槇氏が生前に構想していた建築への向き合い
方や建築が果たすべき社会的責任などについて言及し
た。また、ある時は建築家として、ある時は師として、
ある時は友人としてなど様々な視点から語られるお話
を通じて建築作品以外の「人物としての槇氏」につい
ても議論が展開された。

富永譲氏は、槇氏が東京大学教授就任時から晩年まで、

公私ともに交流があり、様々な場面を通して感じたこ
とを紹介した。富永氏は槇氏について、「人間の生き
方の勇気と美しさ、そして倫理と気品をまわりに響か
せていた建築家として心に深く刻まれている。」と綴
る。講演中何度も槇氏の気品さや気高さについて言及
していたことが印象的であり、建築家としてだけでなく
プライベートでの付き合いが多かった富永氏ならで
はのお話で興味深かった。

栗生明氏は、槇総合計画事務所に 6 年、東京大学槇研
究室助手として 3 年勤めた経歴をもとに、「建築家の
師として、教育者としての槇氏」について語った。建
築家としての槇氏は大変クールな印象で実務に実直に
取り組む一方で、大学での槇氏は学生に対して気さく
に話しかけ、親身に相談に乗るなど暖かい人柄であつ
たと槇氏の多様な人間性についてエピソードを交えて
語った。講演の中で栗生氏は、槇氏に建築家は部屋で
図面を引くだけでなく、現場に出て様々な専門家と共
に建築を創りあげていくことが建築家であることを学
んだと述べた。また、栗生氏が千葉大学で教鞭をとら
れていた時期に、あのはな記念講堂の未修復保存活用
に至った経緯を紹介する中で、槇氏の建築のディテール
について熱く語られていたのが印象に残った。

宮崎浩氏は、1979 年～1989 年の間、槇総合計画事務
所に勤務され、所員から見た「現場での槇氏」を多様
なスケッチとともに語った。宮崎氏は大阪電通ビル、
京都国立近代美術館、TEPIA の 3 つの現場を担当され、
上図のスケッチのような槇氏のもつイメージを現場所
員がどのように形に落とし込むのかなどを当時のリアル
な現場の空気感と共に紹介した。槇氏は複数のプロ



当日のスライド、槇氏の風景観を語る三谷氏。

ジェクトを同時進行していく中で、それぞれを別々に考えるのではなく、ある現場で素材やマテリアルをチェックする時に、この素材は別のプロジェクトで利用できるなど、常に同時に建築設計を考えていたそう。そして最後に、事務所での経験や建築作品を通して槇氏から学んだことを次の世代に残していきたいという想いを述べた。

三谷徹氏は、槇氏の作品の多くのランドスケープを手掛けられた経験から、「ランドスケープアーキテクトから見た槇氏」について、槇氏が土地に抱いていた想いや風景への眼差しを紹介した。三谷氏は、槇氏が俯瞰的にプランを構想するのではなく、常に自分の足で現場を歩き、その情景をつかむ「情景の構想化」を行っていたと語った。槇氏と共にプロジェクトを進めていく中で、記憶としての風景が自身の建築に影響を与えているという「風景観」が建築家には重要であると感じたと述べた。特に出雲の島根県立古代出雲歴史博物館では、建築は脇に寄せ、奥の山景を主役にするといった考えの一貫性に感銘を受けたと話した。そして、三谷氏が多くのプロジェクトを通して感じた、情景の構想化など槇氏の建築家としての風景観についても解説し、槇氏の中には、最初からひとつの風景があり、その風景への参加として建築があったのではないかと述べた。

亀本ゲリー氏は、槇総合計画事務所での「建築家としての槇氏」について語った。亀本氏と槇氏は1981年の秋、アメリカで出会った。亀本氏は自身の人生の歩みについてこう語る。

「槇さんとの出会いから私の道のりは、始めは槇さんの下で、その後は槇さんと一緒に MAKI AND ASSOCIATES というプロジェクトを育てていく旅である。それは、日本の建築文化の深化と、国際的な建築実践という、2つの軸を持った進化の過程でもあった。」



当日のスライド、亀本氏の言葉を最後に講演が締めくくられた。

亀本氏は国際コンペのエピソードを通して、槇氏が国際的に広く知られていく過程について述べた。その中の槇氏と I.M. ペイとの対談のエピソードでは、槇氏が I.M. ペイを「A CITIZEN OF THE WORLD」（世界の市民）と表現し、そのような人はチャーミングな性格とともに知識的な個性を持つと評価したそう。亀本氏は、槇氏について、I.M. ペイと同様に「A CITIZEN OF THE WORLD」であると評し、「国際的な建築実践（国際性）」と「人間主義－A New Humanism」に根差した建築を追求し続ける姿勢こそが、槇氏が我々に託した願いとメッセージであると述べ、講演は締めくくられた。

3. 当日のディスカッション

各自のプレゼンテーションの後、5名のパネラーによるディスカッションが行われた。亀本氏は、槇氏が富永氏に差し上げたピースに対しての実状の紹介した。その中で、建築は単に物を創るものではなく、知識と感情と合理性をブレンドした「Human Empathy」であるというお話が印象的であった。

4. まとめ

私が学生レポーターとして感じたことは、槇氏は常に建築が果たす社会的責任や意義についてを熟考し、その上で圧倒的なディテールを誇る建築作品を残されてきたという点である。パネラーの皆さまのお話でも、建築を建築単体で捉えるのではなく、建築が存在することによる影響や未来に与える役割を見据えて建築や都市に向き合ってきたことを実感した。このセッションを通して私は、槇氏が残してくれたものを引き継いでいく世代の1人だと自覚し、自身の活動を行っていきたく考えた。

「私にとっての槇文彦」をめぐり、登壇者それぞれが異なる視点でエピソードや持論を踏まえながら紹介され、「槇氏が我々に残してくれたもの」について思考を展開し、セッションは盛況のうちに閉会した。

S18 International Presidents' Forum (IPF)

開催日時：2025 年 11 月 7 日（金） 14:10 ～ 15:40

会 場：千葉県文化会館・大練習室

登壇者：エヴェリン・リー AIA（アメリカ建築家協会）会長
アセー・スカヤン ASA（タイ王立建築家協会）会長
キム・ジェロク KIRA（大韓建築士協会）会長
リエ・ギブソン KIRA（大韓建築士協会）国際委員長
ハン・ヨング KIA（韓国建築家協会）会長
佐藤尚巳 JIA（日本建築家協会）会長
竹馬大二 JIA（日本建築家協会）国際委員会アドバイザー

REPORTER



沓掛涼太

（千葉工業大学大学院 修士2年）



当日の様子。登壇者と参加者で白熱した建築議論が行われた。

1. 企画の意図

本トークセッションは、世界各国の建築家協会の代表が集まり、社会の変化が進む現在において、建築家がどのような役割を担うべきかを改めて考えることを目的として企画されたものである。AI 技術の急速な発展や環境問題、人口減少といった課題は、建築のつくり方だけでなく、建築家の働き方や社会との関わり方にも大きな影響を与えている。こうした中で、建築家は単に建物を設計する存在ではなく、社会の変化に回答しながら新しい価値を生み出す役割を求められている。本セッションでは、各国の建築家協会が抱える課題や取り組みを共有することで、建築家という職能の今後のあり方について考える場が設けられた。

2. トークセッションの概要

司会は日本建築家協会（JIA）国際委員会アドバイザーの竹馬大二さんが務め、アメリカ、タイ、韓国、日本の建築家協会代表が順に登壇した。発表内容はそれぞれの国の社会状況や制度を背景としたものであったが、建築家が社会とどのように向き合うかという共通のテーマが通底していた。

最初に登壇したアメリカ建築家協会（AIA）会長のエヴェリン・リーさんは、建築分野における AI 活用の現状について話した。AI を単なる作業の効率化のための道具としてではなく、建築実務の進め方そのものを

変える可能性を持つ存在として捉えている点が印象的であった。AIA では AI タスクフォースを設立し、建築家が AI をどのように使うべきか、またどの部分を人間が判断すべきかについて議論を進めているという。学生の立場からも、AI を使うかどうかよりも、その結果をどのように受け止め、判断するかが重要であることを改めて考えさせられた。

続いて登壇したタイ王立建築家協会（ASA）会長のアセー・スカヤンさんは、協会が行っている社会的な取り組みについて紹介した。建築展の収益を地域文化や地方の活性化に還元する仕組みや、市民参加型のプロジェクトの事例が示され、建築が社会や経済と密接に結びついていることが具体的に伝えられた。設計行為だけでなく、その後の社会との関係まで含めて建築家の仕事であるという考え方が、実践を通して示されていた点が印象に残った。

3 人目に登壇した大韓建築士協会（KIRA）のキム・ジェロクさんと国際委員長のリエ・ギブソンさんは、建築家の教育や報酬制度、国際交流について発表を行った。建築家を短期的に評価するのではなく、教育から実務、継続教育までを一つの流れとして考える必要性が語られた。また、規制が過剰になることで建築表現の自由が制限されてしまうという指摘は、建築文化の豊かさについて考えるきっかけとなった。

続いて、韓国建築家協会（KIA）会長のハン・ヨンゲンさんは、韓国の建築の歴史を三つの時代に分けて説明した。現在は、建築家だけでなく市民と協力しながら社会をつくっていく段階に入っているという話は、建築の価値を専門家だけのものにしない姿勢を感じさせるものであった。また、AI の発展によって人間の感性や倫理がより重要になるという指摘は、他の登壇者の発表とも共通しており、本セッション全体を通じた重要なテーマであると感じられた。

最後に、日本建築家協会（JIA）会長の佐藤尚巳さんが登壇し、AI が担える仕事と人間が担うべき仕事について整理して説明した。情報処理や分析はAI が得意とする一方で、文化的な判断や社会的な責任は人間にしか担えないという考え方は、今後の建築実務や教育の方向性を考える上で理解しやすい内容であった。

現在は、建築家だけでなく市民と一緒に社会をつくっていく段階に入っているという話は、建築の価値を社会と共有することの大切さを改めて感じさせるものであった。また、AI の発展によって人間の感性や倫理がより重要になるという指摘は、他の登壇者の意見とも共通していた。



3 人目に登壇した、KIRA 国際委員長のリエ・ギブソンさん。



4 人目に登壇した、KIA（韓国建築家協会）ハン・ヨンゲンさん。

3. 当日の質疑応答

質疑応答では、人口減少や建築教育、AI をどの段階で取り入れるべきかといったテーマが取り上げられた。AI 教育についての質問に対し、エヴェリン・リーさんは、導入の時期よりも、建築教育全体の考え方を見直すことが重要であると述べた。特に、技術の使い方を教える以前に、建築家として何を判断し、どこに責任を持つのかを明確にする必要があるという指摘が印象に残った。

また、人口減少社会における建築の役割については、量を増やすことよりも、暮らしの質を高める方向へ視点を転換する必要があるという意見が出された。住宅や都市をどのように維持し、使い続けていくかという問題は、国による状況の違いはあっても、今後避けて通れない共通課題であることが確認された。

4. まとめ

本トークセッションを通して、建築家は建物設計するだけの存在ではなく、社会と人との関係を空間として形にする役割を担っていることが改めて示された。AI や技術が進歩しても、建築の価値を最終的に決めるのは人間であり、倫理や文化への配慮が欠かせないという点は、すべての発表に共通していた。

学生レポーターとしては、設計の技術を身につけることに加えて、社会とどのように向き合い、どのような価値を提供するのかを常に考え続ける姿勢が重要であると感じた。各国の事例や考え方を知ることで、日本の建築教育や将来の実務を、より広い視点から見直すきっかけにもなった。

本フォーラムは、建築家の将来像を国境を越えて共有すると同時に、これから建築を学び続けていく立場にとって、自身の進む方向や専門性のあり方を考えるための重要な機会となった。



登壇者（左から）：竹馬大二さん、ハン・ヨンゲンさん、佐藤尚巳さん、エヴェリン・リーさん、キム・ジェロクさん、アセー・スカヤンさん。

S19 「建築家」って誰ですか？

開催日時：2025 年 11 月 7 日（金） 16:00 ～ 17:30

会 場：千葉大学みのはな同窓会館

登壇者：古谷誠章 ナスカー級建築士事務所／日本建築士会連合会会長

小野田泰明 東北大学教授／日本建築学会会長

佐藤尚巳 佐藤尚巳建築研究所／日本建築家協会会長

藤沼傑 ウィスト建築設計／JIA 職能資格制度委員会・

UIA 建築家職能 PPC 委員・

ARCASIA 建築家職能 ACPP 委員

慶野正司 アトリエ慶野正司／JIA 新資格制度委員会

REPORTER



高山 菜佑子
(千葉大学大学院 修士2年)



当日の会場。トークセッションは質問形式で展開された。登壇者の紹介と併せ、「建築家とは何か」について、それぞれの考えが語られた。

1. 企画の意図

本企画「建築家って誰ですか？」は、日本において日常的に用いられている「建築士」・「設計士」・「建築家」といった呼称の違いを起点に、建築家の職能や社会的役割を改めて問い直すことを目的として開催された。日本では、建築物の設計・工事監理を行う資格として建築士法に基づく「建築士」が制度化されている一方で、「建築家」は法令上定義された職業名称ではない。しかし実務や社会の中では、「建築家」という言葉が専門職として一定の意味を持って用いられてきたのも事実である。

本セッションでは、建築設計の第一線で活躍する実務者、建築教育や学術を担う研究者、さらに国際的な職能制度に関わる登壇者を迎え、それぞれの立場から「建築家とは誰か」、「社会においてどのような責任を担う存在なのか」について議論が行われた。海外の制度や事例を参照しながら、日本における建築家の必要性、職能の明確化、さらには将来的な制度化の可能性を考えることが、本企画の大きな狙いである。

2. トークセッションの概要

冒頭、本セッションの司会を務めた慶野正司氏より、企画趣旨の説明がなされ、日本では「建築家」という言葉が制度上明確に位置づけられていない現状と、そ

の曖昧さが生む課題について説明があった。セッションは、司会者から登壇者へ質問を投げかけるかたちで進められた。

まず古谷誠章氏は、建築家の立場について、医師や弁護士とは異なり、建築家は施主の「人生の良い局面」に関わる存在である一方、契約関係においては立場が弱くなりやすい点を指摘した。また、近年の建築教育や設計テーマの変化に触れ、失われた環境や価値を回復する役割を担う建築家の重要性を述べ、見返りの少なさを承知の上で志をもって取り組む姿勢が求められると語った。

小野田泰明氏は、建築家の職能は設計行為そのものにとどまらず、建築や空間が社会の中でどのように機能し、評価されるかまでを含めて考える必要があるとし、その基盤としての建築教育の重要性を強調した。さらに、日本の設計発注制度の脆弱性について、設計料が過小に評価されがちな現状が、結果としてコスト増大や建築の価値低下につながっている点を指摘し、プロポーザル方式や海外の設計競技制度を踏まえた改善の必要性を示した。

藤沼傑氏は、日本と海外における建築家資格と職能の違いを比較し、設計者選定、事務所経営、プロジェクトリスク管理といった「設計以前・以後」を含む職能



日の落ちた会場では終始穏やかな雰囲気、主題である「建築家」ってだれですか？という問いに対してじっくりと議論された。

の重要性を提示した。日本では一級建築士資格があれば事務所運営が可能である一方、海外では設計者がより重い社会的・法的責任を負う制度となっていることが紹介され、建築家の責任範囲をどう捉えるかが重要な論点として示された。

佐藤尚巳氏は、「建築士」や「設計士」が依頼者との一対一の関係で業務を遂行する存在であるのに対し、「建築家」は依頼者のみならず社会全体を視野に入れて判断する専門職であると整理した。その象徴として示された「三方よし（依頼者・自分・社会）」という考え方は、建築家の公共性と倫理性を端的に表すものとして印象的であった。

後半のディスカッションでは、建築家は社会の中でどのような立場を担うべきかについて議論が深められた。ゼネコンが多くの役割を担ってきた日本の建設生産体制が変化の中で、これまで担保されてきた品質や調整機能を、今後は建築家が引き受けていく必要があるのではないかという指摘がなされた。また、海外では建築家とエンジニアが同一組織内で協働する体制が一般的であることが紹介され、日本における分業構造との違いが浮き彫りとなった。

さらに AI の進展により、設計作業の一部が自動化される時代を迎える中で、建築家には単なる技術力ではなく、提示された案が社会的に妥当かどうかを判断する能力、倫理性、実務経験に裏打ちされた責任ある意思決定が一層求められることが共有された。最終的には、国際的にも承認される資格制度の構築と、建築家の自立性を担保する制度設計の必要性が展望として示された。

3. まとめ

私が学生レポーターとして本セッションを通じて強く感じたのは、「建築家」とは肩書きではなく、社会に対する姿勢や責任の取り方によって成立する職能であ



大会一日目の最後の開催であった本トークセッションは参加者が会場に収まりきらないほどだった。

るという点である。設計技術の巧拙だけでなく、誰のために、どの範囲まで責任を引き受けるのかという問いに向き合い続ける姿勢こそが、建築家を建築家たらしめていると感じた。

特に印象に残ったのは、「建築家は依頼者だけでなく社会全体を見ている存在である」という言葉である。学生として設計課題に取り組む際、敷地条件やプログラムを満たすことに意識が向きがちであったが、その先にある社会や人々の生活まで視野に入れて考えることの重要性を改めて認識させられた。また、AI の発展により設計行為そのものは変化していく一方で、何が正しいかを判断し、責任を引き受ける役割は人間である建築家に残り続けるという指摘は、これから建築を学び続ける立場として大きな示唆を与えるものであった。

制度や資格の議論についても、それが単なる制限や肩書きではなく、社会にとって信頼できる建築家を「見える化」するための仕組みであるという考え方は、建築家という職能をより現実的に捉えるきっかけとなった。将来どのような立場で建築に関わるにせよ、社会に対して誠実であること、そして自らの判断に責任を持つ姿勢を忘れずに学び続けていきたいと感じたセッションであった。

S20 偉大な先輩建築家に学ぶ Vol.10

～大高正人一人と都市と建築～

開催日時：2025 年 11 月 7 日（金） 16:00 ～ 17:30

会 場：千葉県文化会館・大ホール

登壇者：松隈洋 神奈川大学教授／京都芸繊維大学名誉教授
藤本昌也 日本建築士会連合名誉会長／現代計画研究所名誉会長
中島直人 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻教授
中尾明 都市設計研究所代表
仙田満 環境デザイン研究所会長／NPO 建築文化継承機構理事
上浪寛 構想建築設計研究所代表取締役社長／NPO 建築文化継承機構代表理事

REPORTER



鹿野田大樹
(千葉大学大学院 修士2年)



当日の会場。大高氏とのエピソードを通して次の世代に語り継ぐ



当日スライド。メタボリズム・グループ内での大高正人氏の位置づけについて

1. 企画の意図

本企画は、NPO 建築文化継承機構による建築家の設計文化財や思想、言説などを後世に継承することを目的としたシンポジウムで、金沢工業大学建築アーカイブス研究所とともに年に一度開催される JIA 建築家大会における大会プログラムの一つとして企画・運営されている。毎回、開催地にゆかりのある建築家・建築史家を取り上げ、その地域や文化をいかに捉え、作品を創出していたのかを、後継者や関係者、薫陶を受けた方のエピソードを通して次の世代に語り継ぐことを目的にしている。第十回を迎えた今回は、本大会メイン会場である千葉県文化会館を設計した建築家・大高正人氏を主題とした。前回の別府大会「磯崎新 根掘り葉掘り」に続き、「大高正人 人と都市と建築」をテーマにメタボリズムの建築家として、楽観的な未来社会志向から距離を取りながら、広島基町高層住宅など、戦後の住環境改善と地域の再構築をテーマに設計活動をされてきた「建築家大高正人」の思想を語り継ぐ。

2. トークセッションの概要

冒頭、NPO 建築文化継承機構理事を務める仙田満氏より、本企画の意図の解説や、NPO 建築文化継承機構/JIA-KIT 建築アーカイブスの活動目的についての紹介と挨拶をもってセッションが開会した。セッションでは、登壇者それぞれが大高氏との出会いや関係性を交えつつ、氏が生前に構想した社会や人と建築の関係、さらに開発の進行によって変容する郊外農村のあり方などについて言及した。これらを、氏が建築理念として掲げた「PAU」の「U（アーバン）」を共通の主題として、代表作品の紹介を通じて議論が展開された。

松隈洋氏は、生前に大高氏と交わした書簡を示しながら、「生きた人間の生活をそのまま抱えて整理し形づくる」という氏の理念を紹介し、その思想が具象化した三春町体育館などの作品を具体例として提示した。

中島直人氏は、メタボリズム・グループ内での大高氏の役割を「キャッチャー」と位置づけ、都市に溢れる人口の受け皿としての農村の意義について、住宅公団との協議を重ねながら模索した南多摩ニュータウン自然地形案を例に挙げた。既存の自然環境や集落との調和を重視した氏の姿勢は、戦後都市の生活環境悪化や住宅不足といった深刻な課題に真正面から向き合った建築家としての責務を体現していたと述べた。

藤本昌也氏は、建築空間と都市空間の関係性に関する大高氏の着眼点を取り上げつつ、槇文彦氏の群造形の思想が現代建築において十分に継承されていない点を指摘した。そのうえで、現在の都市デザインは本来の方向性から逸脱しつつあるため、都市空間の貧困化に対する新たな議論が求められると提言した。

中尾明氏は、かつて人の往来が少なく船員の街であったみなとみらい地区において、大高氏が港湾空間を囲む公園緑地ネットワークや湾曲する親水護岸による都市景観の創出に尽力した点を紹介した。都市空間の快適な歩行動線と施設集積による賑わいの創出に向け、氏が「えんぴつ役」として調整を担った姿勢は、現代の建築家にも求められる役割であると述べた。



当日スライド・大高正人氏の学生時代に作成した師・前川國男氏の自邸 外観透視図の貴重な一枚

セッション後半では、公共建築と社会のこれからをテーマにディスカッションが展開された。議論は「PAU」の“U（アーバン）”に焦点を当て、都市および建築群を通じて社会的現実を読み解く方法論に及んだ。また、メタポリズム内部での大高氏の位置づけや、氏が残した「とにもかくにも困難な 21 世紀です」という言葉が、今日の社会環境といかに響き合うかについても深い検討が行われた。

3. 大高正人が次世代へ残した最後のメッセージ

本企画の主題である建築家・大高正人氏は、多様な建築作品と思想を後世に遺した人物であり、その人生は戦争体験を背景に独自の建築観を形成していった。セッションでも紹介された氏の次世代への最後のメッセージは、今日の建築および社会に対する鋭い洞察を含むものであり、会場に深い思索を促すものであった。以下にその全文を引用する。

「私の世代は、戦争から背後の甚だしい荒廃を経験して、思いがけずにデモクラシーの下で、一応は豊かな生活を取り戻しました。しかし、その間に大都市には限りなく人々が降り積もり、農村からは人々がどんどん消えてしまうなど、現在の都市と農村には様々な歪みがあります。21 世紀には、必ず大きな問題が起きることが今までの経験から推測できるので、その間でぜひ良い仕事をされるよう、成功されることを強く希望します。とにもかくにも困難な 21 世紀です。」

4. まとめ

私が今回、学生レポーターとして感じたことは、大成し後世に多大なる影響を与えた建築家は、単に卓越し

た造形力や設計技術を持つだけでなく、社会の変化を深く洞察し、人々の営みや地域の歴史に真摯に向き合う姿勢を貫いているという点である。登壇者の語りから浮かび上がった大高正人氏の人物像は、作品の評価を超えて、広く社会の課題に応答しようとする強い倫理観と、他者の知恵を受け止めながら協働を促す柔軟さに満ちていた。

また、氏が残した「困難な 21 世紀」という言葉は、現代の都市と農村が抱える構造的なひずみを鋭く指摘すると同時に、次の世代に対する強い期待のメッセージでもあると感じた。建築家という職能が、空間をつくるだけでなく、多様な価値観が交錯する社会そのものを読み解き、未来の環境を構想する役割を担っていることを、改めて実感した。

シンポジウムを通して私は、建築を学ぶ者として、自身がこれから向き合うべき視座の広がりや責任の重さを強く自覚した。大高氏の思想に触れたことで、建築が社会に寄与し得る可能性をより主体的に探求していきたいと感じている。こうした建築家の思考の軌跡に触れることで、社会と空間の関係をより深く理解し、自らの設計観を磨く重要性を改めて認識した。

「建築家・大高正人」をめぐる、登壇者それぞれがエピソードや視点を交えながら活発に意見を交わし、セッションは予定時間を 30 分超過する盛況のうちに閉会した。

S21 《越境建築家》たちとの対話

～「越境」が建築家にもたらすもの～

開催日時：2025 年 11 月 7 日（金） 16:00 ～ 17:30

会 場：千葉県文化会館・大練習室

登 壇 者：井本佐保里 研究者／

日本女子大学建築デザイン学部建築デザイン学科准教授

後藤克史 建築家／ Squareworks LLP 主宰

山道拓人 建築家／ツバメアーキテクツ代表取締役／

法政大学デザイン工学部建築学科准教授

早野洋介 建築家／ MAD Architects 共同主宰

坂田泉 建築家／ JIA 国際委員長／ OSA ジャパン

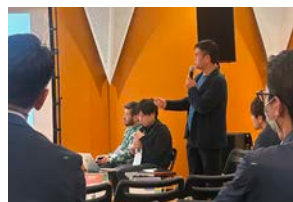
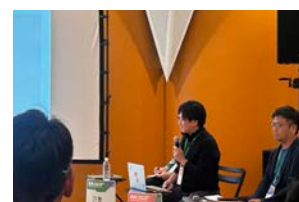
REPORTER



藤本 千廣
(千葉工業大学大学院 修士1年)



当日の会場の様子。会場には幅広い年齢層の聴衆が集まった。



坂田さんの司会のもと、登壇者が自身の越境体験について語った。

上段左：坂田さん 上段右：井本さん
中段左：後藤さん 中段右：山道さん
下段左：早野さん

1. 企画の意図

本企画では、国境そして建築家としての職能、職域を超えて世界で活動をしている《越境建築家》によるトークセッションが行われた。《越境建築家》たちは、越境することによって何をもたらし、そして何をもたらされたのかを考えた。

2. トークセッションの概要

グローバル化が加速した現代において、国境・文化・職能といった境界を超えて活動する建築家や研究者たちは、現地の人々との関係性を築きながら実践を行っている。本セッションは、ケニアで土についての研究活動をしている司会の坂田泉さんのもと、4人の登壇者によって進められた。坂田さんの「現在行っている活動において、どのような業種や職能を超えて関わっているのか。そして越境することで自身が何をもたらし、また何をもたらされたのか」という問いに応答するかたちで議論は展開された。

まずは登壇者がそれぞれの活動を紹介した。

井本佐保里さんは、ケニアのスラムへと越境した研究者だ。インフォーマル居住地で住民と共に学校のセルフビルドなどを実践してきた。しかし、その学校は再開発計画によって撤去されてしまう。そこで、屋根を掛けるなど、柔軟性の高いセルフビルドを行い、スラムの政治的・社会的状況に応じた設計を実践した。研究者としての専門領域から現場という非専門的職域へ越境するとともに、教育の境界や権利をも横断する取り組みが特徴的である。

インドを拠点に活動する建築家の後藤克史さんは、3つのプロジェクトを通して自身の越境経験を紹介した。1つ目は、地域分散型インフラであるバイオフィルターの開発で、NGOや地元企業との協働により、建築家が担うインフラ設計の限界を越えた実践を行った。2つ目のマーケットのプロジェクトでは、限られた予算で緩やかな公共空間をつくるために屋根をかけるという設計を行った。このプロジェクトを通して学んだこととして、施設を与えるだけでは住民が使わないことも多く、ユーザー側のキャパシティを考慮した設計が重要だと考えていると述べている。3つ目は、プロセスを重視したアーティスト・イン・レジデンスの開催について。参加者にプロンプトを与え、それについての制作を行う。そして参加者がワークショップで制作した作品たちを南ムンバイのオープンスタジオで展示するという取り組みを紹介した。

ツバメアーキテクツの山道拓人さんは、博士課程時代にシェアオフィスの運営や設計、ベンチャー支援など幅広い職能を横断して活動してきた。近年では北沢で、かつて使われていた線路敷地を若い世代が改造しながら暮らすプロジェクトに取り組み、庇や外壁のルールづくりや、改造しやすいディテールの設計を行った。そのように仕組みや、ある程度のルールをつ



トークセッションの様子。

くることによって、建築の知識をもたないユーザーが自ら空間をつくることを可能にし、非専門家と建築をつなぐ橋渡し役を果たしている。

MAD Architects の早野洋介さんは、「越境した」という感覚よりも、漂うように北京へたどり着いたと述べ、文化や言語の違いを抱えながら他者と協働する姿勢を語った。多様な文化背景を持つスタッフや社会と関わりながら、違和感を内包したまま建築設計に取り組んでいる。

4 人のプレゼンテーションが終わり、坂田さんは「領域横断によって何が自身にもたらされたのか」という点に議論を向けた。

早野さんは、越境する際には自分が開かなければならないと述べた。言語や育った環境の違いからお互いを完全に理解することは難しい。そこで生まれる行間を自身の想像力で埋め、違和感を内包しながら関わっていくことが大事である。そして仕事をしていく中で、建築においても違和感を感じるという。日本の建築は緻密であるが、中国の建築は解像度が荒いもののおおらかであるという特徴を持つ。その違いをなんとか融合できないかということに興味があるという。

これらの実践に共通して見られるのは、自身および関わる相手の立場を固定化せず、関係性をあえて“ルーズ”に保つ姿勢である。関係の解像度を荒くし、柔軟に関わることで、新たな協働の可能性を生み出している。登壇者の多くに見られる姿勢として、デザインする側と使用する側を分離せず、共に空間をつくり上げることや、改築・再構築を積極的に受け入れるといった取り組みが挙げられる。これにより、建築家という職能の枠を越えた実践が実現している。

彼らの活動は、言語や文化、職能、さらには法律や固定観念さえも越えて展開されている。越境する建築家には、異なる文化や言語を完全に理解できなくとも、他者と関わり続ける姿勢と覚悟が見られる。

越境とは、人と力を集める行為であると坂田さんが述べられたのが印象的であった。

3. 当日の質疑応答

「越境の中で、使う人とデザインする人の立場が重なり合っている様子が良い。あえて両者を分けないというスタンスなのか」という問いが投げかけられた。

これに対し、早野さんは、大規模なプロジェクトでは多様な文化的背景を持つ人々と関わることになるため、大切なビジョンを見失わないことが重要だと述べた。その一方で、細部まで理解し合おうとするのではなく、あえて関係の解像度を荒く保ちながら関わることで、違いを内包した協働が可能になると語った。

また後藤さんは、自身はあくまで施主を支える立場であり、主体は常に施主側にあるという意識を持って設計に向き合っているという。質疑応答を通して、越境的な実践においては、立場を固定せず、それぞれの役割を柔軟に捉える姿勢が重要であることが改めて示された。

4. まとめ

私はこのセッションに参加して、越境とは特別な場所へ行ったり、大きな行動を起こしたりすることだけではなく、自分の立場や専門を絶対的なものとせず、他者との関係の中で揺らし続ける姿勢そのものなのだと感じた。登壇者たちは、建築家としての成果だけでなく、関わる人々との関わり方や、そのプロセスを大切にしていた。その姿勢から、建築は一人で完結する行為ではなく、人と人との関係の中で生まれるものだ改めて感じた。また、違和感やわからなさをすぐに解消しようとせず、それらを抱えたまま関わり続ける姿勢が印象に残った。越境とは、境界を消すことではなく、違いがあることを前提としたうえで、それでも関係を結び続ける行為なのだと感じた。

S22 オーバービューセッション せんのちからと建築家のつながり

開催日時：2025 年 11 月 8 日（土） 16:00 ～ 17:30

会 場：千葉県文化会館・大ホール

登壇者：筏久美子 ギャラリーディレクター／TOTO ギャラリー・間代表

佐藤尚巳 建築家／佐藤尚巳建築研究所／日本建築家協会会長

平田晃久 建築家／平田晃久建築設計事務所／京都大学教授

森田祥子 建築家／MARU. ARCHITECTURE

今村創平 建築家／千葉工業大学教授

REPORTER



猪股 楓
(千葉工業大学大学院 修士2年)



セッション開始時の様子。今村さんの進行のもと、登壇者それぞれの活動が、各々の「建築家のありかた」を提示するかたちで説明された。

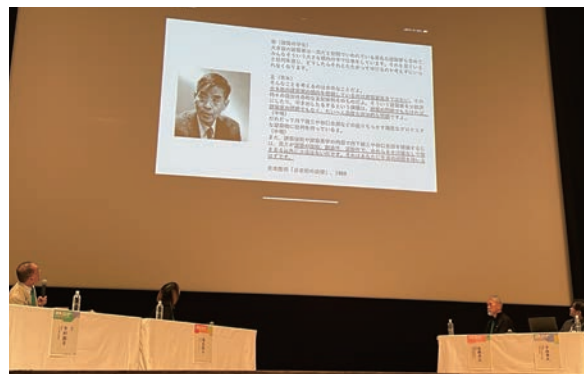
1. 企画の意図

近年、建築家が担う役割は「建築空間を設計する専門家」という従来の枠組みを超え、社会の構造や人々の関係性を編集する存在へと大きく拡張している。本セッションは、自立分散型の社会ネットワークのなかで、「せんの声をそれぞれがどう建築に組み込むか」という主題のもと、建築家・キュレーターらによって現代の建築家のあり方がいかなる方向へ向かっていくのかを議論したものである。

2. トークセッションの概要

冒頭、進行を務めた千葉工業大学教授 今村創平さんと JIA 会長 佐藤尚巳さんから、世代・性別・背景の多様性をいかに組織へ取り込むかについて、問題提起がなされた。

既存の建築家団体において平均年齢やジェンダー比の偏りが指摘される一方、若い世代や異なる専門領域の人々を巻き込む試みが進みつつある。建築家の活動が社会に対して十分に知られていないという問題も指摘され、佐藤さんからは「頼りになる存在」として建築家を認識してもらうことが組織運営の重要課題とされた。これは、建築家が独自の活動を展開する以前に、建築家が社会の信頼を獲得し、その知性を公共性の中で発揮していくための基盤づくりであると言える。本大会が、市民に開かれたかたちで主催されたものの、建築関係者の参加がほとんどを占めていたことも今後の課題として示された。



今村さんは、「建築家とはなにか」について過去の建築家の言葉を紹介した。

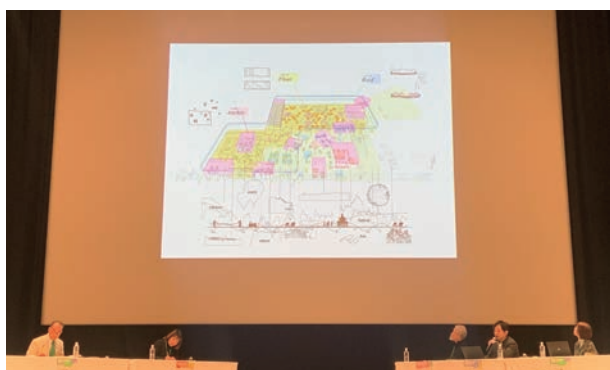
MARU. ARCHITECTURE 共同主催の森田祥子さんは、市民参加型プロジェクトの実践から得られた知見を示した。千葉の団地での集会所建て替えのプロジェクトから、従来の建築家による「誰でも参加できる」ワークショップ型の参加手法だけでは限界があるとし、地域のキーパーソンとの長期的な信頼関係構築が不可欠であると指摘した。建築家は、住民や行政の立場を調整する媒介者として機能し、基本計画や発注段階から行政とともにビジョンを描く役割を果たし始めていると、過去の設計活動と共に説明した。

MARU. ARCHITECTURE の活動からは、地域の人々や建築に携わる技術者など、多岐にわたる立場の調停者として建築家を位置づける様子がうかがえた。

平田晃久さんは、膨大な市民の要望や活動パターンをコンピューショナルな手法で解析し、空間計画へ反映する取り組みを報告した。

「山形市民会館」・「小千谷市ひと・まち・文化共創拠点ホントカ。」を具体例に、住民と設計者とAIを包括的に扱った設計プロセスが紹介された。AIを用いて大量のテキストデータから特徴的なワードを抽出し、それを空間のコンセプト形成へ転換するという手法は、従来の経験則中心の設計プロセスを大きく更新するものである。

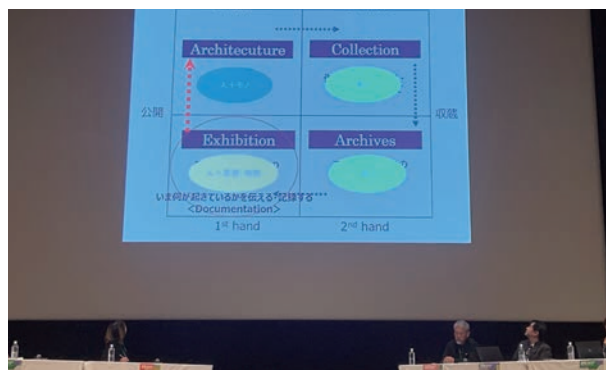
ここでは、市民の生の声が単なる「意見」ではなく、データとして体系化され、建築の論理として再編される。言い換えれば、平田さんは空間的構造へ翻訳する独自の設計手法を生み出すことで、さまざまな事物を共存させる建築を試みていると感じた。



平田さんは、「数値化できないものを体系化する」独自の設計手法について紹介した。

TOTO ギャラリー・間 代表で建築展のギャラリーディレクターを務める筏久美子さんは、建築思想やプロセスのアーカイブ方法について言及した。

建築作品が物質として都市に存在し続ける一方、建築家の思考や制作過程は形式知として残りにくい。展示会はそれらを可視化し、社会に伝達するための装置となると語った EXPO2025 大阪・関西万博の施設設計に携わった若手建築家による企画展「新しい建築の当事者たち」では、展示によって現代における建築の公共性について、それぞれの方法を同時多発的に可視化されたことを述べた。また、国際的な建築の動きにも触れ、人権問題や気候変動を建築的技法により可視化する活動は、建築の領域が政治・環境・倫理へと接続されつつある現状を示した。



筏さんが「建築がアーカイブされ人々に公開されていく流れ」を説明している様子。

今回、登壇者によるプレゼンテーションによって明らかになったのは、建築家の活動は建築家の数だけ多様化し、建築の領域が他分野と接続されていることだ。

冒頭、今村創平さんは、磯崎新や吉本隆明を引用し、その時代の建築家像について触れたが、そうした「建築家がどうあるべきか」という変遷を辿ったのち、現代の建築家像は、自律分散型に拡張していると言えるのではないかと。

建築家が社会に対して果たす役割が増大し、より複合になっている。建築は形をつくる技術に留まらず、社会の課題を読み解き、関係性を再構築し、人々の生の営みを支える基盤をつくる行為へと変容している。

佐藤尚巳さんは、日本各地の建築家がそれぞれの場所で「町医者」のように活躍していることを社会に認識してもらうことが大切だと述べた。また、同時に建築家は包括的にさまざまな能力を身につける必要があることも指摘している。

3. まとめ

私が今回、学生レポーターとして感じたのは、純粋な「町医者」のように活躍する建築家への憧れと、対照的に社会から建築家の職能が必要とされていないのではないかと不安である。フランク・ゲーリーがそうであったように、建築家が芸術家に近い立ち位置で作品を残す姿は、日本の社会から許容されなくなっているようにも思える。その中で、現代の建築家が、様々な方法や視点から活動を展開している様子が、今大会全体での印象として残った。これからの建築家がどうあるべきか、最前線で活躍する建築家の対話の中で、一緒に考えられた貴重な機会であった。



プレゼンテーション後のディスカッションの様子、平田さんのAIによる最新の設計手法や、今後の建築家のあり方について議論された。

JIA 建築家大会 2025 千葉 大会式典

開催日時：2025 年 11 月 7 日（金） 13:00 ～ 13:50

会 場：千葉県文化会館・大ホール

登 壇 者：佐藤尚巳

栗生明

渡邊大海

鈴木弘樹

松野秀夫

神谷俊一

エヴェリン・リー

建築家／佐藤尚巳建築研究所

建築家／千葉大学名誉教授

建築家／大宇根建築設計事務所

建築家／千葉大学准教授

建築指導課長／国土交通省住宅局

千葉市長

建築家／SMB 設計事務所

REPORTER



山田拓武
(千葉大学 研究生)



大会式典で挨拶をする佐藤尚巳 JIA 会長



1. 大会式典の概要

冒頭、司会進行を務める一条沙蓉さんの紹介を受け、鈴木弘樹実行委員長の開会宣言により大会式典の幕は開けた。

鈴木実行委員長は、建築家大会は、建築家である同志が集い、交流や情報交換を深める場であり、本大会は関東甲信越支部・千葉地域会が中心となって準備を進め、建築家に限らず、市民や学生も参加できる開かれた大会を目指して、多くの来場者を迎え、参加者にとって実りある大会となることへの期待を述べた。

続いて、栗生明大会委員長が挨拶を行った。

栗生大会委員長は、全国および海外から参加した建築家への感謝を述べられるとともに、千葉大会のテーマ「せんのちから」について紹介された。このテーマは実行委員会で熟慮のうえ決定されたもので、「千葉」の「せん」、「専門家」の「せん」、「先頭」の「せん」、「戦う」の「せん」など多様な意味を重ね持つ言葉であると解説された。

また、栗生さん自身の設計経験に触れ、「せんのちから」から「千手観音」を想起したと述べ、多くの手がそれぞれ異なる道具を持つように、建築家も知識や技術、思いやりを携えて社会に向き合う存在であり、人々に安心や楽しさ、憩いの場を提供する役割を担っていることが語られた。最後に、2 日間にわたる大会での議論や交流が、参加者の新たな活動につながることへの期待を述べられ、大会を楽しんで欲しいとの言葉で挨拶が締めくくられた。

続いて、佐藤尚巳 JIA 会長が挨拶を行った。

佐藤会長は、JIA 建築家大会 2025 千葉の開催にあたり、来賓および参加者への謝意を述べられた。その後、2025 年は猛暑や集中豪雨、さらにはクマ被害など、気候変動や自然の危険性を強く意識させられる一年であったことに触れ、社会全体が自然と向き合う姿勢の見直しを迫られていると指摘された。

同時に建築界においても、激甚化する自然災害への対応、また人材不足や資材価格の高騰など社会情勢の変化に直面していることを述べられた。こうした中で急速に進化する AI 技術により、将来的には設計業務の多くが代替される可能性がある一方で、それでもなお必要とされ、信頼される建築家の役割とは何かが問いかけられた。最後に、大会テーマ「せんのちから」に触れ、多様性を尊重し、社会とつながる建築のあり方について、参加者とともに実りある議論を深めていきたいとの思いが述べられ、挨拶が締めくくられた。

次に来賓を代表し、国土交通省住宅局建築指導課長松野秀夫氏より祝辞が述べられた。大会の開催を祝うとともに、日本建築家協会が建築家の資質向上や建築文化の発展に長年尽力してきたことへの敬意が示された。また、今後の建設から解体までを含めたライフサイクル全体での CO₂削減や、人材確保・育成の重要性

当日の式典会場

上段

左：鈴木実行委員長・右：栗生大会委員長

中段

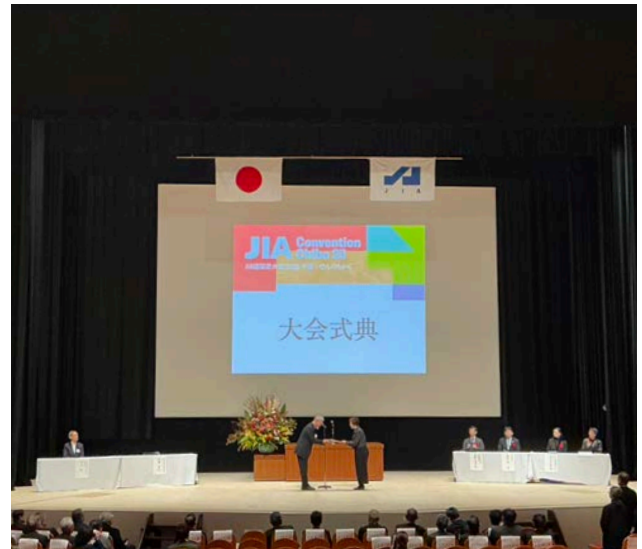
左：神谷千葉市長・右：ご来賓の皆さま

下段

左：渡邊関東甲信越支部長



左：名誉会員証授与式の様子 右：フェロー会員証授与式の様子



が強調され、中長期的なビジョンの検討を進めていく考えが示された。結びとして、制度の改正や社会環境の変化に的確に対応しつつ、建築の質と技術のさらなる向上に向けた日本建築家協会および会員の積極的な活動への期待が述べられ、祝辞が締めくくられた。

同じく来賓として千葉市長 神谷俊一氏より歓迎の挨拶が述べられた。神谷市長は、JIA 建築家大会 2025 千葉の開催を祝うとともに、全国からの来訪者を心より歓迎し、日本建築家協会および千葉地域会が建築文化の発展や建築行政に果たしてきた役割への敬意と謝意を示された。また、大会テーマ「せんのちから」は、千葉市が進める市民参加型のまちづくりや芸術祭の理念とも通じるものであり、多様な分野が連携して街の力を引き出す重要性が語られた。千葉駅周辺で進められているウォークアブルなまちづくりや道路空間の再編、公園・公共空間の活用などの取組が紹介され、建築と文化、芸術が人の交流を生み出す都市づくりへの期待が述べられた。結びに、千葉開府 900 年を迎える節目に向け、建築家とともに持続可能なまちづくりを考え進めていきたいとの思いが示され、歓迎の挨拶が締めくくられた。

続いて AIA 会長のエヴェリン・リー氏より、JIA 建築家大会への招待に対する感謝と祝意が述べられた。建築の世界は社会の要請と深く関わるものであり、AI の進展など大きな変化の中で、建築家には多様性を受け入れ、人々をつなぐ専門職としての役割がより一層求められていると語られた。また、JIA と AIA の長年にわたる協力関係や、知識交換・国際的なコラボレーションの重要性を強調し、日本の建築家が国際的にも高く評価されてきた実績を紹介した。こうした協力関係への感謝とともに、今後も日米の建築家が連携し、建築文化と社会への貢献を広げていきたいとの期待が示され、祝辞が締めくくられた。

来賓者紹介の後に名誉会員授与式が行われ、新たに名誉会員になられた横河健氏（関東甲信越支部）、道家

駿太郎氏（近畿支部）、吉羽逸郎氏（近畿支部）、エヴェリン・リー氏（アメリカ建築家協会 会長）、ハン・ヨンゲン氏（韓国建築家協会 会長）の 5 名に佐藤尚巳会長から名誉会員証とメダルが授与され大きな拍手が送られた。

続いて正会員のなかから特に建築家協会に貢献された方に授与されるフェロー会員の会員証授与式が行われた。

2025 年度にフェロー会員になられた方は次の 9 名。佐藤孝氏（北海道支部）、笹栗達夫氏（北海道支部）、三栖博氏（北海道支部）、大瀧正也氏（東海支部）、車戸慎夫氏（東海支部）、近江美郎氏（北陸支部）、井上久実氏（近畿支部）、岡田良子氏（近畿支部）、所千夏氏（近畿支部）

9 名を代表して井上氏に佐藤尚巳会長より、フェロー会員証とバッジが授与され、フェロー会員になられた方々に大きな拍手が送られた。

授与式終了後、閉会に際して渡邊太海関東甲信越支部長が挨拶を行った。

渡邊太海関東甲信越支部長は、大会式典が無事終了したことへの感謝を述べるとともに設営に尽力した JIA 関係者や会場関係者への謝意を表した。今大会では多彩なセッションを通じて、JIA の日常的な活動や、市民とともに街や社会をつくる議論を体感して欲しいと述べ、さらに建築家の役割や志を一般の方や学生にも感じてもらいたいとの思いを示し、大会式典の閉会を宣言した。

2. まとめ

今回、私が学生レポーターとして感じたことは、式典を通じて開催地の千葉や日本国内からだけでなく国外からも注目されることから大会の規模の大きさと多くの人々が参加している意義深さであった。

■ 編集後記

JIA 建築家大会 2025 千葉の企画に際しては、建築家だけでなく、市民・学生・自治体関係者・技術者など、次世代の建築・まちづくりに関わる多種多様な方々にも参加頂ける大会のあり方を模索してきました。

その企画の一環として、本大会では「学生レポーター」・「サポートスタッフ」と名づけた2つの役割を実行委員会に提案し、実現することができました。

サポートスタッフは、千葉大学 鈴木弘樹研究室・千葉工業大学 今村創平研究室の有志で構成され、大会準備や5つのトークセッション会場の運営を支援してくれました。

学生レポーターも同様に、千葉大学 鈴木弘樹研究室・千葉工業大学 今村創平研究室の面々が中心となって、22のトークセッションと大会式典の計23の公式プログラムを学生の視点からレポートしてくれました。

本大会では、取り扱うテーマの幅を広げることを目的に最大5プログラムの同時進行が前提となるタイムスケジュールとしたため、すべてのトークセッションを視聴することが難しいことは企画時点でも課題となりました。ここから生まれたのが『学生レポーターによる大会報告』です。

23名の学生レポーターは、『公式ガイドブック』に示された概要を事前に読み込むなど、入念な準備を行うとともに、当日はセッションに参加し、登壇者の発言を丁寧に拾いながらレポートにまとめてくれました。

本書に掲載した23のレポートは、いずれも会場の空気感までもが伝わってくるような素敵なレポートとなっています。これに学生自身の感想や解釈が加えられることで、「新たな視点の発見」にも繋がる興味深い一冊となっています。

23のレポートは、建築・まちづくりにまつわる現状課題と次世代のあり方や方向性を示すものであり、相互に関連性や類似性が見られることも特徴です。

本書には次世代の建築・まちづくりを担う「学生のちから」が結集されています。是非とも御一読頂ければ幸いです。

最後になりますが、本企画の実現に際して御協力頂いたすべてのみなさまに感謝を申し上げます。

水越英一郎

JIA 建築家大会 2025 千葉 実行委員会
副実行委員長・企画部会